

K S G 4 2 0 0

F M - A M 標準信号発生器

取 扱 説 明 書

第 4 版

菊 水 電 子 工 業 株 式 会 社

(KIKUSUI PART NO. Z1-477-510)

M-94073

— 保 証 —

この製品は、菊水電子工業株式会社の厳密な試験・検査を経て、その性能が規格を満足していることが確認され、お届けされております。

弊社製品は、お買上げ日より1年間に発生した故障については、無償で修理いたします。但し、次の場合には有償で修理させていただきます。

1. 取扱説明書に対して誤ったご使用および使用上の不注意による故障・損傷。
2. 不適当な改造・調整・修理による故障および損傷。
3. 天災・火災・その他外部要因による故障および損傷。

なお、この保証は日本国内に限り有効です。

— お 願 い —

修理・点検・調整を依頼される前に、取扱説明書をもう一度お読みになった上で再度点検していただき、なお不明な点や異常がありましたら、お買上げもとまたは当社営業所にお問い合わせください。

目 次

	頁
1. 概 説	1
1.1 概 要	1
1.2 特 長	2
2. 仕 様	3
3. 使用前の注意事項	8
3.1 着荷時の開封検査のお願い	8
3.2 電源電圧の確認	8
3.3 周囲温湿度・予熱時間・設置場所について	8
4. 使 用 法	9
4.1 正面パネルの説明	9
4.2 背面パネルの説明	11
4.3 電源の投入	12
4.4 周波数の設定	12
4.4.1 テン・キーによる設定法	12
4.4.2 ロータリ・ノブの使用法	15
4.4.3 周波数ステップ  、  キーの設定法	16
4.4.4 周波数偏差  キー、及び  キーの使用法	17
4.5 出力レベルの設定	19
4.5.1 テン・キーによる設定法	19
4.5.2 ロータリ・ノブの使用法	20
4.5.3 出力レベル・ステップ  、  キーの設定法	21
4.5.4 O F F S E T の設定法	22
4.5.5 出力レベル偏差  キーの使い方	22
4.5.6  キーの使い方	23
4.5.7 単位キーの設定範囲	23
4.5.8 出力レベルの単位について	24
4.6 変調の設定	24
4.6.1  キーの使用法	24

4.6.2	変調ソースの設定法	24
4.6.3	テン・キーによる設定法	25
4.6.4	「MODULATION」表示器のフラッシング	26
4.6.5	ロータリ・ノブの使用法	27
4.6.6	変調度ステップ  、  キーの設定法	28
4.6.7	外部変調信号の接続と設定法	29
1)	接続と設定法	29
2)	設定範囲の説明	29
4.7	メモリーの使用法	30
4.7.1	メモリーのリコール方法	30
4.7.2	メモリーにストアする方法	31
4.7.3	メモリーの全アドレスにストアしない場合 ( キーの設定法)	33
4.7.4	 キーの解除法	33
4.7.5	リコールするメモリーを10ステップ以上連続して使用する場合 ( キーの設定法)	34
4.7.6	 キーの解除法	34
4.7.7	同一機種へのメモリー・コピー	35
5.	リモート・コントロール	36
5.1	概説	36
5.1.1	概要	36
5.2	使用法	36
5.2.1	リモート・コントロール・コネクタの説明	36
5.2.2	入力データのタイミング	37
5.2.3	パネル面キー・コード表	38
5.2.4	外部コントロールで周波数をセットする例	40
5.2.5	リモート・コントロール回路図例と動作説明	41
5.2.6	「MEMORY」表示器の出力回路例	42
6.	出力インピーダンス、ダミー・アンテナ等の切替信号	43
6.1	「RANGE OUTPUT」RCAピン・コネクタ	43

7. バック・アップ電池、CPUのリセットについて	43
8. GP-IB	44
8.1 概 説	44
8.1.1 概 要	44
8.1.2 特 長	44
8.2 性 能	44
8.2.1 インターフェイス機能	44
8.2.2 インターフェイス・システムに関する電氣的仕様	44
8.3 使 用 法	45
8.3.1 使用法の準備	45
8.3.2 アドレス設定法	45
8.3.3 使用可能なバス・ライン・コマンド、及びコマンド一覧	47
8.3.4 プログラム・コード表	47
8.3.5 基本的なデータ設定法	51
8.3.6 コネクタ・ピン配列	52
8.3.7 参考資料（プログラム例）	53
9. アクセサリ（オプション）	54
9.1 SA100 テスト・ループ	54
9.2 SA150 分波器	55
9.3 SA151・SA152 カー・ラジオ用ダミー・アンテナ	57
9.3.1 SA151 カー・ラジオ用ダミー・アンテナ（負荷端型）	58
9.3.2 SA152 カー・ラジオ用ダミー・アンテナ（開放端型）	59
9.4 SA153 出力切換器・SA154 出力インピーダンス切換器	60

1. 概 説

1.1 概 要

KSG4200は、基準の水晶発振器にフェーズ・ロックされるPLLを利用した、シンセサイザー方式のFM-AM信号発生器です。

周波数は、50kHz～140MHzをカバーし、高安定な信号（ 2×10^{-7} / WEEK）を100Hzの分解能で発生します。

その用途としては、FM放送、並びにAM放送を中心とした受信機の諸々の測定に最適で、操作は容易なりコール、及び数値エンター式です。

出力レベルは、開放端 $-20.0\text{ dB}\mu \sim 132.0\text{ dB}\mu$ （ $0.1\mu\text{V} \sim 4\text{V}_{\text{rms}}$ ）の信号を 0.1 dB の分解能で出力し、単位キーによりEMF $\text{dB}\mu$ 開放端表示、 $\text{dB}\mu$ 負荷端表示、又、 dBm 表示が可能で、更に、ダミー・アンテナ等を使用した時の損失分の補正（OFFSET）が出来ます。

変調は、FM、AM、FM-AMの3モードが可能で、最大変調は、FMで99.9kHz偏移、AMで99.9%、内部変調、外部変調とも可能です。

FMひずみは、0.05%以下（1kHz、75kHz偏移）と極めて小さく、FMチューナの開発、製造ラインでの調整に最適です。

AM外部変調特性は、20Hz～20kHzで、又、寄生FMも少なく、FMチューナのAM抑圧比測定が正確に行えます。

操作は、リコール式（メモリー100ポイント）で数値エンター、インクリメント・キー、ロータリ・ノブ、及び Δ キーで更に操作性を高めます。

数値エンター・キーにより、任意の周波数、出力レベル、及び変調度等がストア出来、ロータリ・ノブは、従来のSGの感触を保ち違和感がなく、周波数と出力の Δ 表示は、相対値測定に威力を発揮します。

リモート・コントロールは、パネル面のキー操作、ロータリ・ノブ等がコード化されており、背面の14Pコネクタによりコントロールする事が出来ます。又、同一機種へのメモリー・コピーやメモリー連動等の拡張機能が使用出来ます。

又、GP-IBコントロールが標準搭載ですので、生産ライン等の省力化が図れます。

1.2 特 長

- 1) 周波数は、7桁までデジタル設定が出来、任意の桁（カーソルで指示）でのロータリ・ノブによる連続可変が可能です。
又、 $\Delta FREQ$ （周波数偏差）表示、及び選択度特性を見る為の+/-機能も備えています。
- 2) 出力レベルは、 $-20 \sim 132 \text{ dB}\mu$ （開放端）と広範囲で、 0.1 dB ステップで4桁のデジタル設定が可能です。
又、高周波出力のON/OFF機能もついています。
- 3) 任意の設定値でインクリメント・キーにより周波数、出力レベル、及び変調度のステップ送りが出来ます。
- 4) 変調は、FM 3.5 kHz 、 22.5 kHz 、 75 kHz 、及びAM 30% のプリセット・キーがついておりワンタッチで操作出来、変調のON/OFFは、AM、FMをそれぞれ独立に操作出来ます。
- 5) 変調ひずみ、S/N比、ステレオ特性が優れています。
- 6) パネル面表示の全てのデータをメモリーする事が出来、1ブロック当たり10ポイントで10ブロックの分割使用出来、又、連続100ポイントのストア、リコールが出来ます。
- 7) 全ての操作は、マイクロ・プロセッサによりコントロールされ、設定値はデジタル表示されますので大変分かり易くなっています。
- 8)  BS（バック・スペース）キーを利用する事により、入力されたデータを素早く修正する事が出来ます。
- 9) メモリーされたデータを、同一機種のメモリーに  DUMP キーを押す事によりワンタッチで一度にコピーする事が出来ます。
- 10) メモリーのストア・リコール、周波数、出力レベル、変調度の設定、ロータリ・ノブ等、パネル面全ての操作がリモート・コントロール出来ます。
- 11) 周波数、出力レベル、変調度、メモリー等のGP-IBコントロールが標準搭載です。

2. 仕 様

○ 周波数 (R F)

範 囲	50kHz~140MHz
分 解 能	100Hz
表 示	7桁数字表示、 $\Delta FREQ$ 表示、及び±周波数反転機能付
確 度	$\pm 2 \times 10^{-6}$
安 定 度	$\pm 2 \times 10^{-7}$ /週 始動 48H後

○ 出力レベル

範 囲 最 大 出 力

単 位 系	F M 変 調 の 時	A M 変 調 の 時
EMF dB μ	132dB μ	126dB μ
dB μ	126dB μ	120dB μ
50 Ω dBm	+19dBm	+13dBm

最 小 出 力

単 位 系	50kHz~140MHz
EMF dB μ	-20dB μ
dB μ	-26dB μ
50 Ω dBm	-133dBm

単 位 系 0dB=1 μ Vとする開放端電圧を示すEMF dB μ と
負荷端電圧を示すdB μ 、50 Ω 系のdBmの3種

分 解 能 0.1dB

表 示 4桁数字表示、3種の単位系について直読表示
 Δ dB表示、任意の値でOFFSET表示

以下の記述は、全てEMF dB μ のみとして単にdBと表す。

基準レベル確度 出力126dBにて

- 1) ± 1 dB RF ≥ 400 kHz
- 2) ± 2 dB RF < 400 kHz

減衰器確度

- 1) ± 1 dB 出力 ≥ 20 dB
- 2) ± 1.5 dB 出力 ≥ 0 dB
- 3) ± 2 dB 出力 < 0 dB

RF・ON/OFF ~~RF OFF~~ キーによる、高周波出力 ON/OFF機能付

出力インピーダンス 50 Ω BNC型コネクタ

V S W R ≤ 1.2 出力60dBにて
 ≤ 1.5 その他の出力

スプリアス出力 基本波 (基本波 = 0dBc)、出力 ≤ 126 dBにて

高調波 ≤ -30 dBc

非高調波 ≤ -60 dBc RF ≤ 32.5 MHz
 (測定範囲 ≤ 90 MHz)
 ≤ -50 dBc RF > 32.5 MHz
 (測定範囲 ≤ 140 MHz)

残留変調 (S/N)

FM成分 復調帯域幅 300Hz $\sim$ 15kHz、
 ディエンファシス 50 μ s、75kHz偏移にて

1) ≥ 87 dB RF 75 $\sim$ 110MHz
 2) ≥ 80 dB RF ≥ 32.5 MHz
 3) ≥ 70 dB その他のRF

AM成分 復調帯域幅 50Hz $\sim$ 15kHz、30%変調にて

1) ≥ 60 dB RF 400kHz $\sim$ 1.7MHz
 2) ≥ 55 dB その他のRF

○ 変 調

FM・AM同時変調 FM、AM、FM-AM同時変調、それぞれ次の信号ソースを選べる。

- 1) 外部
- 2) 内部 400Hz
- 3) 内部 1kHz

内部変調周波数 400Hz、1kHz $\pm 3\%$ (2波内蔵)

外部変調

- 1) 入力インピーダンス 約10k Ω (不平衡)
- 2) 入力電圧 約3V_{p-p}

【注】 上記入力電圧に対し $\pm 2\%$ 幅のHI-LOモニタ付

< F M >

周波数偏移、分解能

周波数	300k $\sim$ 3MHz	3 $\sim$ 32.5、65 $\sim$ 140MHz	32.5 $\sim$ 65MHz	
周波数偏移	0 $\sim$ 30kHz	0 $\sim$ 99.9kHz	0 $\sim$ 49.9kHz	50 $\sim$ 99kHz
分解能	100Hz	100Hz	100Hz	1kHz

但し、RF $\times 10\%$ RF ≤ 300 kHz

表 確	示 度	3桁数字表示 最大周波数偏移の
		1) $\pm 5\%$ RF $> 3\text{MHz}$ 2) $\pm 10\%$ RF $\leq 3\text{MHz}$
外変周波数特性		20Hz $\sim$ 100kHz、1kHz基準にて $\pm 1\text{dB}$ RF 75 $\sim$ 110MHz $\pm 1.5\text{dB}$ その他のRF
セパレーション		変調周波数 1kHz、75kHz偏移にて 1) $\geq 55\text{dB}$ RF 10.7 $\pm$ 1MHz、83 $\pm$ 1MHz、 98 $\pm$ 1MHz 2) $\geq 50\text{dB}$ RF 75 $\sim$ 110MHz
ひ ず み		復調帯域幅 300Hz $\sim$ 15kHz、ディエンファシス 50 μ s、変調周波数 1kHz、75kHz偏移にて 1) $\leq 0.05\%$ RF 10.7 $\pm$ 1MHz、 75 $\sim$ 110MHz 2) $\leq 0.1\%$ その他のRF
寄 生 A M		変調周波数 1kHz、75kHz偏移、 RF 10.7 $\pm$ 1MHz、75 $\sim$ 110MHzにて $\leq 0.5\%$
<A M>		
設 定 範 囲		0 $\sim$ 99.9%
変 調 度 範 囲		0 $\sim$ 80% 出力 $\leq 126\text{dB}$ にて
分 解 能		0.1%
表 示		3桁数字表示
確 度		変調度 $0 \leq 80\%$ 1) $\leq (\text{表示値} \pm 5)\%$ RF 400kHz $\sim$ 1.7MHz 2) $\leq (\text{表示値} \pm 10)\%$ その他のRF
外変周波数特性		1) RF 400kHz $\sim$ 1.7MHz、1kHz基準、 50Hz $\sim$ 20kHzにて $\pm 1\text{dB}$ 2) その他のRF、1kHz基準、50Hz $\sim$ 10kHzにて $\pm 1\text{dB}$

- ひ ず み 復調帯域 50Hz~15kHz、変調周波数 1kHz、
30%変調にて
1) $\leq 0.3\%$ RF 400kHz~1.7MHz
2) $\leq 1\%$ その他のRF
- 寄 生 F M 出力 ≤ 126 dB、変調周波数 1kHz、30%変調にて
 ≤ 75 Hz
- 設 定 機 能 1) テン・キー、ロータリ・ノブ（カーソル位置）により周波数、出力レベル、変調レベル、及びメモリーの設定
2) ステップ・キー
周波数、出力レベル、変調レベル
3) プリセット・キー
FM変調 3.5kHz、22.5kHz、75kHz、
AM変調 30%
- メモリー機能 1) 100ポイント
周波数、出力レベル、変調レベル、変調の種類等
2) 10ポイント×10、又は、連続100ポイントまで
使用可能
- ダンプ機能 **DUMP** キーにより、100ポイントのメモリー内容を同一機種に転送可能
- リモート・コントロール
周波数、出力レベル、変調レベルのストア、リコール、及び周波数、出力レベル、変調レベルのステップ送り、ロータリ・ノブによる連続可変、変調のON/OFF等
- GP-IBインターフェース
SH0、AH1、T0、L1、SR0、RL1、PP0、
DC1、DT0、C0
- レンジ・アウト（ダミー・アンテナ切替出力）
RF ≥ 35 MHz “1”（5V MAX 50mA）
RF < 35 MHz “0”（0V）
- 漏洩電界強度 0dB（1 μ V）の測定に支障ない
- バック・アップ電池付き

- 電 源 AC 100、115、215、230V±10%
(背面スイッチにて切替え)
- 周 波 数 50Hz/60Hz
- 消 費 電 力 約 60VA
- 機 構
- 外形寸法 430W × 99H × 300D mm
445W × 119H × 355D mm (最大部)
- 質 量 約 10 kg
- 環境条件 (温度、及び湿度)
- 仕様を満足する範囲 5～35℃ 85%以下
- 最大動作範囲 0～40℃ 90%以下
- 付 属 品
- 出力ケーブル (SA550) 1本
- 電源コード 1本
- ヒューズ 1.5A 1本
- 〃 0.8A 1本
- 取扱説明書 1部
- パラレル・インターフェイス (オプション工場出荷時)
- 但し、GP-IBインターフェイスとの併用は不可

3. 使用前の注意事項

3.1 着荷時の開封検査のお願い

本器は、工場を出荷する前に機械的、並びに電氣的に十分な試験・検査を受け、正常な動作を確認され保証されています。

お手元に届きしだい輸送中に損傷を受けていないかをお確かめ下さい。

万一、不具合がございましたらお買い求め先に、直ちにご連絡下さい。

3.2 電源電圧の確認

本器は、背面の電圧切替プラグにより、下表に示す動作電圧範囲で使用する事が出来ます。

電源コードを接続する前に電源電圧と電圧切替プラグの設定を確認して下さい。

なお、設定電圧範囲を切替えは、ヒューズも下表に従って交換して下さい。

設定電圧範囲外での使用は、動作不完全、或いは、故障の原因になります。

設 定 位 置	中 心 電 圧	使 用 電 源 範 囲	使 用 ヒ ュ ー ズ
A	100V	90～110V	1.5A
B	115V	104～126V	
C	215V	194～236V	0.8A
D	230V	207～253V	

3.3 周囲温湿度・予熱時間・設定位置について

本器が正常に動作する周囲温度は、0～40℃の範囲です。

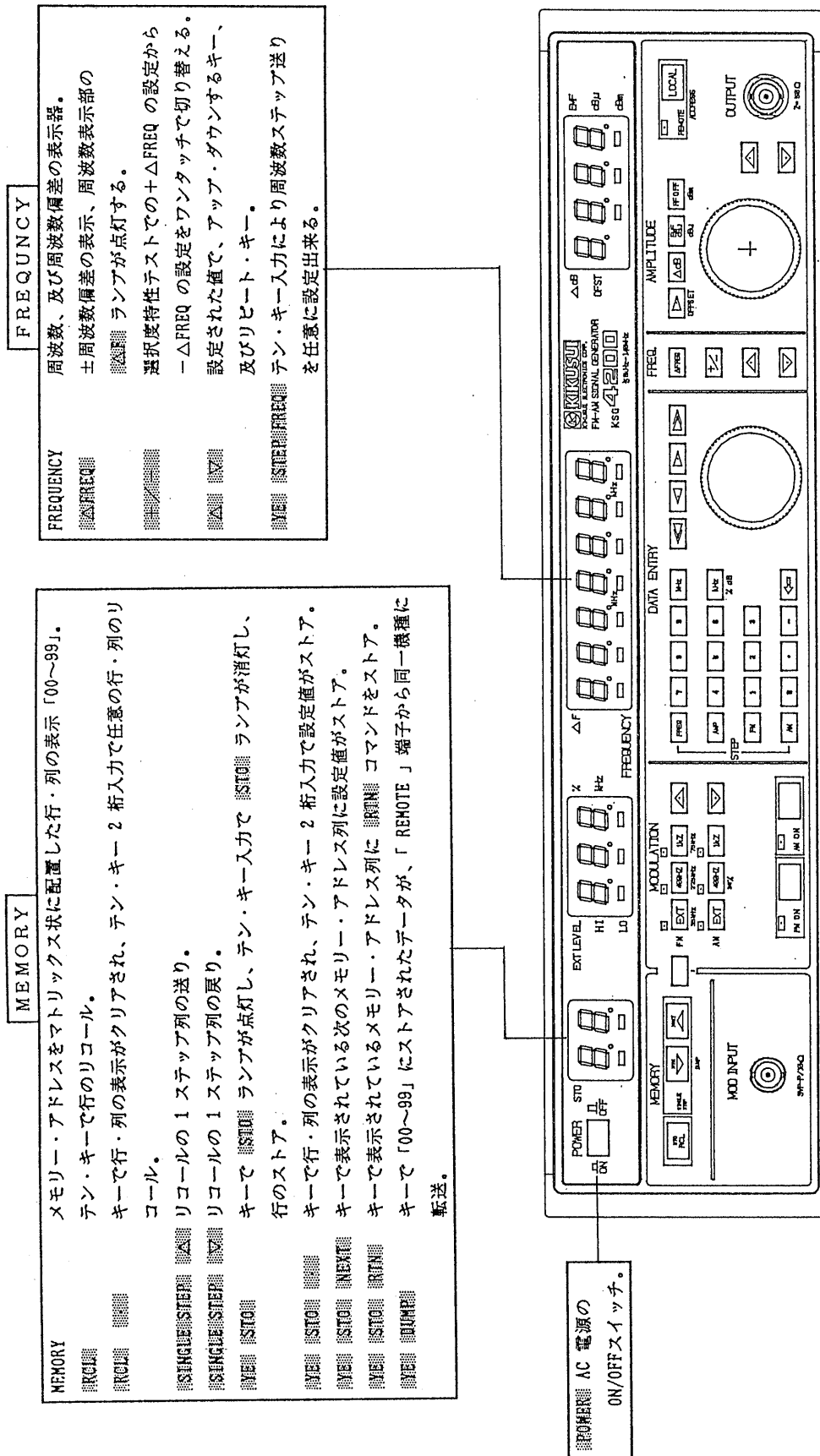
高温、多湿の環境で長期間の使用、又は、放置は故障の原因になり、本器の寿命を短くしてしまいます。

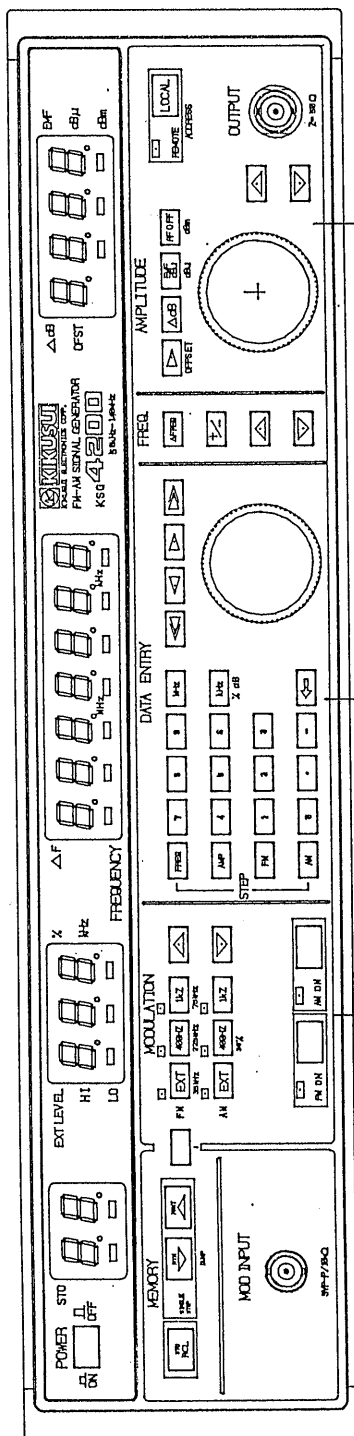
予熱時間は、30分必要とします。

又、周囲に強力な磁界や電磁波等のラジエーションが有る場所での使用は、好ましく有りません。

4. 使用法

4.1 正面パネルの説明





MODULATION

MODULATION FM、又は、AM 変調度を表示する 3 桁のデジタル表示器。
 MODLEVEL FM、又は、AM 単信号入力時の外部変調入力端子。
 EXTELEVEL 外部変調入力レベル範囲の表示器、LEVEL 10 が消えて
 いる時が正常。
 PERCENT AM 変調度 % の表示、最小ステップ 0.1%。
 KHZ FM 周波数値 kHz の表示、最小ステップ 0.1kHz。
 EXTELEVEL 400Hz FM、及び AM の外変・内変の切り替え。
 STEP 設定された値で、アップ・ダウンするキー、及び
 リビート・キー。
 MODON FM 変調を ON/OFF するキー。
 AMON AM 変調を ON/OFF するキー。
 STEP 3.5kHz、22.5kHz、75kHz FM 周波数 3.5kHz、22.5kHz、75kHz のア
 リ
 STEP 30% セット・キー。
 STEP 30% AM 変調度 30% のプリセット・キー。

DATA ENTRY

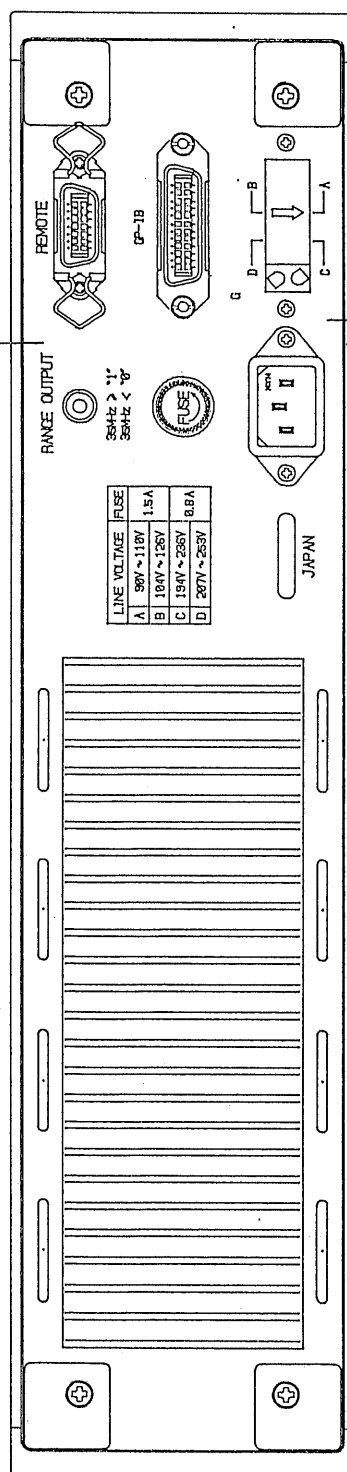
DATA ENTRY 直接数値を入力するキー、及びカーソルの移
 動キー、表示を可変するロータリ・ノブ。
 FREQ 周波数をテン・キーより設定するキー。
 AMP 出力レベルをテン・キーより設定するキー。
 FM FM 周波数をテン・キーより設定するキー。
 AM AM 変調度をテン・キーより設定するキー。
 STEP (0-9、-、-) 数値記号を入力するキー。
 MODLEVEL BS (バック・スペース) キー数値入力途中でのデータ修
 正、又は、STEP 使用時のセンター周波数への戻り。
 MODON 各ブロックへのカーソル移動。
 AMON ブロック内でのカーソル移動。
 STEP カートリ位置でのモディファイ。

AMPLITUDE

AMPLITUDE 高周波出力レベル 4 桁のデジタル表示。
 STEP カートリの移動。
 STEP 出力レベルの偏差表示の切り替え。
 STEP 単位の設定。
 STEP 高周波出力の ON/OFF キー。
 LOCAL GP-1B によるリモート機能の解除。
 STEP カートリ位置でのモディファイ。
 STEP 設定された値でアップ・ダウンするキー、及び
 リビート・キー。
 STEP 高周波出力 BNC 端子、-20.0dB μ ~120.0dB μ
 増放端、信号源インピーダンス 50 Ω
 STEP STEP AMP テン・キー入力により、出力レベル・ステップ
 送りを任意に設定出来る。
 STEP OFFSET ダミー・アンテナ等の補正表示。
 STEP REFERENCE 単位の設定。
 STEP ADDRESS GP-1B のアドレス表示。

4.2 背面パネルの説明

「REMOTE」 パネル面の機能を外部からコントロールするためのコネクタ。
「GP-IB」 GP-IB を用いてコントロールするためのコネクタ。
「RANGE OUTPUT」 RCA タイプのピン・コネクタ。
周波数が 35MHz～140MHz の時 “1” 動作となり、電圧 5V、
電流 50mA の出力が得られ、50kHz～35MHz の時 “0” 動作
となり、出力インピーダンス、カー・ラジオ用ダミー・ア
ンテナ切替用コントロール信号として使用する。



「VOLTAGE SELECTOR」 AC 電源の電圧切替器で、プラグの矢印
を AC ライン電圧に合わせて差し換えて
す。
「ACコネクタ」 AC 電源のプラグ。
「FUSE」 AC 電源のヒューズ、AC ラインの電圧に
適合するヒューズを使用します。

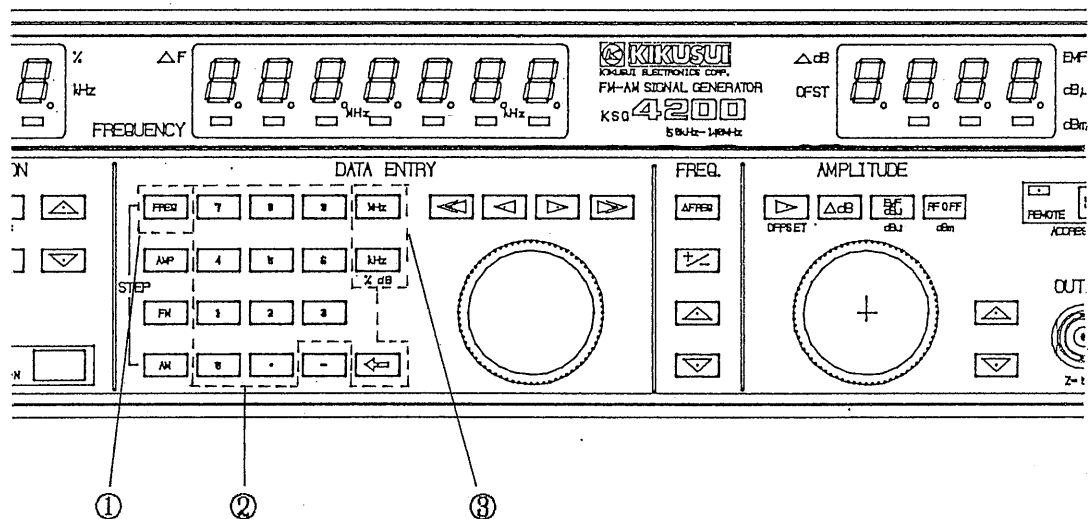
4.3 電源の投入

電源コードを所定の電圧の電源に接続し、**POWER** スイッチを押します。

前面パネルの表示は一度全ての LED が点灯した後（但し、HI・LO 表示を除く）、電源を OFF する直前の状態が表示されます。

4.4 周波数の設定

4.4.1 テン・キーによる設定法



FREQ キーを押し、続けてテン・キー「0～9、・」によって希望の数値を入力し、単位キーを押します。

上図の ① ② ③ の番号順に操作します。

キー操作の途中で で囲まれたキー以外を押すと、**FREQ** キーを押す前の数値が再び表示されます。

テン・キーにより入力完了した時点で、**MHz**、**kHz** キーを押しますと、「FREQUENCY」表示器に正しく表示されます。

この時、入力出来る数値の桁数は 7 桁で、それ以上のものは受け付けません。設定出来る範囲は、50kHz～140MHz までです。

テン・キーを押した時は、もう一度 **FREQ** キーを押し、**0～9** テン・キーで入力するか、又は、誤った数値を **BS** (バック・スペース・キー) で修正します。

MHz、**kHz** 単位キーを押した後は、**AMP**、**FM**、**AM** のキーが押されるまで、**FREQ** キーを押す必要は無く、テン・キー **0～9**、**MHz**、**kHz** 単位キーの操作だけで設定出来ます。

a) 例 123.4567MHz を入力する時

	× 任意の表示
	┐ 点灯せず
キー操作	「 FREQUENCY 」 表示器
FREQ	×××.×××.× 前の表示状態
1	1┐┐┐┐┐┐
2	1 2┐┐┐┐┐
3	1 2 3┐┐┐┐┐
.	1 2 3.┐┐┐┐┐
4	1 2 3.4┐┐┐┐┐
5	1 2 3.4 5┐┐┐┐┐
6	1 2 3.4 5 6┐┐┐┐┐
7	1 2 3.4 5 6 7
MHz	1 2 3.4 5 6.7

b) 例 455kHz を入力する時

キー操作	「 FREQUENCY 」 表示器
FREQ	1 2 3.4 5 6.7
4	4┐┐┐┐┐┐
5	4 5┐┐┐┐┐┐
5	4 5 5┐┐┐┐┐┐
kHz	┐┐┐ 4 5 5.0

c) 例 11MHz を入力するつもりが 12MHz を入力した時

キー操作	「 FREQUENCY 」 表示器
FREQ	┐┐┐ 4 5 5.0
1	1┐┐┐┐┐┐
2 1を2と押して しまった	1 2┐┐┐┐┐┐
Hz	1┐┐┐┐┐┐
1	1 1┐┐┐┐┐┐
MHz	┐ 1 1.0 0 0.0

上記の様に、 テン・キー入力途中で間違えた時は、**Hz** キーを押すと 1 文字削除
出来、連続して押すと最後まで削除され前の表示に戻ります。

d) 例 85.7MHz を入力する途中、キーを押し間違えた時

キー操作		「 FREQUENCY 」 表示器
FREQ		┐11.000.0
8		8┐┐┐┐┐
6	5を6と押し しまった	86┐┐┐┐┐
.		86.┐┐┐┐┐
7		86.7┐┐┐┐┐
↵	2度押す	86┐┐┐┐┐
↵	2度押す	┐11.000.0

MHz、**kHz** 単位キーを押さなければ周波数表示は、以前のままです。

8	8┐┐┐┐┐
5	85┐┐┐┐┐
.	85.┐┐┐┐┐
7	85.7┐┐┐┐┐
MHz	┐85.700.0

e) 例 1MHz を入力するつもりが 11MHz を入力した時

キー操作		「 FREQUENCY 」 表示器
FREQ		┐85.700.0
1		1┐┐┐┐┐
1		11┐┐┐┐┐
MHz		┐11.000.0
1		1┐┐┐┐┐
MHz		┐┐1.000.0

上記の様に、テン・キー入力途中で間違え単位まで設定した場合、次の入力の **FREQ** キーは、省略出来ます。

4.4.2 ロータリ・ノブの使用法

ロータリ・ノブは、「FREQUENCY」表示器の数字の下に有るカーソルが点灯している桁以上の周波数を増減させます。

カーソルが「FREQUENCY」表示器内がない時 、 キーにより、表示器内での移動は、、 キーにより移動させます。

ロータリ・ノブでの設定は、、 単位キーを設定する必要有りません。

a) 例 100MHz から 100.02MHz に変更したい時

— は、カーソル位置を示す

キー操作	「FREQUENCY」表示器
	1 0 0 . 0 0 0 <u>0</u> . 0
 1 度押す。	1 0 0 . 0 <u>0</u> 0 . 0
 ロータリ・ノブを時計方向に 2 ステップ回す。	1 0 0 . 0 <u>2</u> 0 . 0

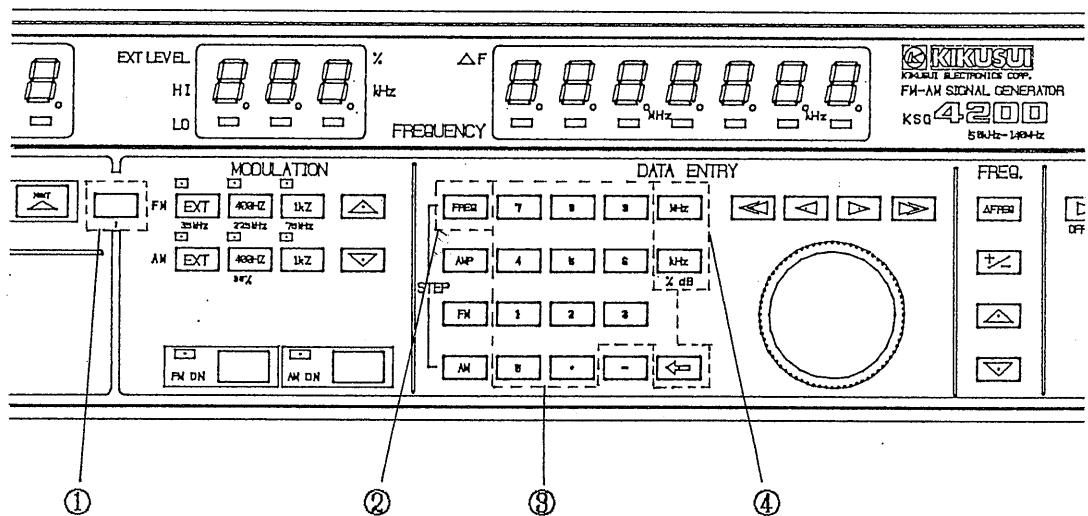
b) 例 100.02 MHz から 98.02MHz に変更する時

キー操作	「FREQUENCY」表示器
	1 0 0 . 0 <u>2</u> 0 . 0
 2 度押す。	1 0 <u>0</u> . 0 2 0 . 0
 ロータリ・ノブを反時計方向に 2 ステップ回す。	<u>9</u> 8 . 0 2 0 . 0

4.4.3 周波数ステップ ΔF 、 ΔF キーの設定法

「FREQUENCY」 ΔF 、 ΔF キーに、任意のステップ値（最小 100Hz）を設定する事が出来、周波数を増減する事が出来ます。

この時「FREQUENCY」表示部のカーソル位置は、関係有りません。



上図に示す ① ② ③ ④ の順番で入力し設定します。

以下の説明で ΔF キーは、① の黄色いキーを示します。

ここで ΔF キーとは、シフト・ファンクション・キーで ΔF を押した後にパネル面の黄色で示された各キーを押しますとその機能が実行されます。

a) 例 周波数 1MHz の時「FREQUENCY」 ΔF 、 ΔF キーに 9kHz を設定する時

キー操作	「FREQUENCY」表示器
ΔF	1.000.0
STEP FREQ	1.000.0
9	9.000.0
kHz	1.000.0
ΔF 1度押す	1.009.0

9 kHz ステップで連続上昇、下降可変する時は、「FREQUENCY」 ΔF 、 ΔF キーを押し続けると、リピート機能が動作します。

4.4.4 周波数偏差 $\Delta FREQ$ キー、及び ΔF キーの使用法

この機能は、周波数の変化量を見るもので、受信機の帯域幅の測定等に威力を発揮します。

$\Delta FREQ$ キーを押すと「FREQUENCY」表示器の ΔF 表示が点灯し、周波数偏差（ $\Delta FREQ$ ）が表示されます。

a) 例 100MHz が設定されている時

キー操作	「FREQUENCY」表示器
ΔF $\Delta FREQ$	××× ××× ×
1	1 _ _ _ _
0	1 0 _ _ _ _
0	1 0 0 _ _ _ _
kHz	××× ××× ×
FREQ	××× ××× ×
1	1 _ _ _ _
0	1 0 _ _ _ _
0	1 0 0 _ _ _ _
MHz	1 0 0 . 0 0 0 . 0
$\Delta FREQ$	_ _ _ _ _ 0 . 0 ΔF が点灯
「FREQUENCY」 Δ	- _ _ 1 0 0 . 0 出力周波数
	99.9 MHz
Δ	_ _ _ _ _ 0 . 0

「FREQUENCY」 Δ 、 ∇ キーを押し続けますとリピート機能が動作し、100 kHz ステップで連続可変出来ます。

この例で Δ キーを押すと、周波数のセンター“0”に戻ります。

b) 例 100MHz が設定されている時

キー操作	「 FREQUENCY 」 表示器	
	1 0 0 . 0 0 0 . 0	
Δ FREQ	┐┐┐ ┐┐ 0 . 0	Δ F が点灯
$\triangleleft$ 3 度押す。	┐┐┐ ┐┐ 0 . 0	
 ロータリ・ノブを 反時計方向に 5 ステップ回す。	┐┐ 5 . 0 0 0 . 0	出力周波数 95 MHz
Δ FREQ	┐ 9 5 . 0 0 0 . 0	Δ F が消灯

Δ FREQ 機能を解除したい場合、もう一度 Δ FREQ キーか、FREQ キーを押します。

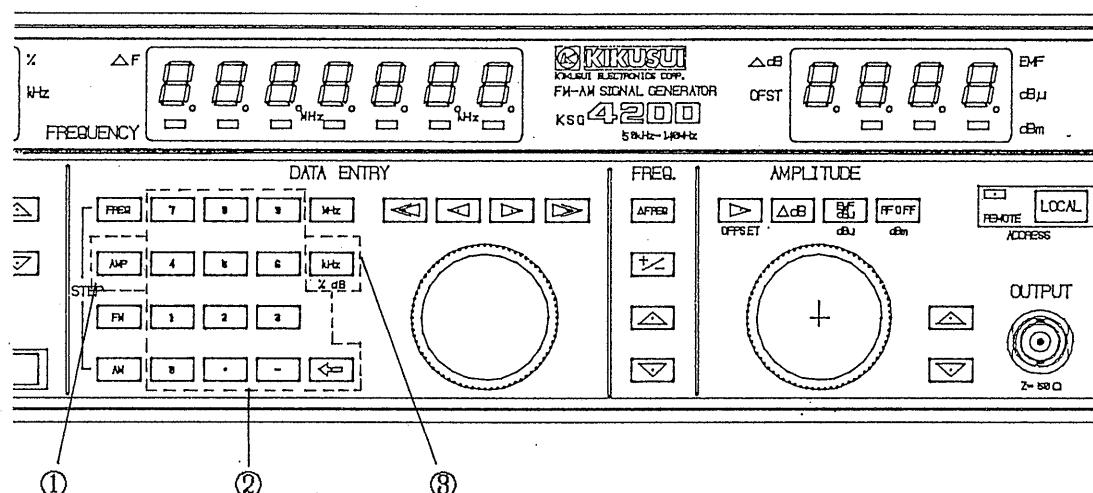
この場合、可変された周波数 95MHz になります。

c) 例 100MHz の時、 Δ FREQ で可変された状態での $+/-$ キーの使用

キー操作	「 FREQUENCY 」 表示器	
	1 0 0 . 0 0 0 . 0	
Δ FREQ	┐┐┐ ┐┐ 0 . 0	Δ F が点灯
2	2 ┐┐ ┐┐┐ ┐	
0	2 0 ┐┐┐┐ ┐	
0	2 0 0 ┐┐┐┐ ┐	
kHz	┐┐┐ 2 0 0 . 0	出力周波数 100.2 MHz
$+/-$	┐┐┐ 2 0 0 . 0	周波数 99.8 MHz
Δ FREQ、又は、 FREQ	┐ 9 9 . 8 0 0 . 0	

4.5 出力レベルの設定

4.5.1 テン・キーによる設定法



「AMP」キーを押し、続けてテン・キー 0～9 によって希望の数値を入力します。上図の ① ② ③ の番号順に操作します。

キー操作の途中で で囲まれたキー以外を押すと、「AMP」キーを押す前の数値が再び表示されます。

テン・キーにより入力完了した時点で、「dB」（「kHz」）キーを押しますと「AMPLITUDE」表示器に正しく表示されます。

a) 例 10dB を設定する時

キー操作

「AMP」

「1」

「0」

「dB」

「AMPLITUDE」表示器

×××.× 前の表示状態

1 . . .

10 . .

10.0

b) 例 -5dB を設定する時

キー操作

「AMP」

「-」

「5」

「dB」

「AMPLITUDE」表示器

10.0

- . . .

-5 . .

-5.0

「AMP」キーは、続けて出力レベルを設定する場合、押す必要ありません。

c) 例 120dB を設定する途中でキーを押し間違えた時

(単位は、EMF dB μ とします。)

キー操作	「AMPLITUDE」表示器
AMP	— 5.0
1	1 — —
3 2を3と押して しまった	1 3 — —
5	1 — — —
2	1 2 — —
0	1 2 0 —
dB	1 2 0.0

テン・キーにより入力途中で間違えた時は、**ENT** キーで修正し、**dB** キーまで押して設定値が違った場合は、もう一度、テン・キー **0~9** で入力します。

又、各単位の最小、最大値範囲外のレベルを設定しますと、前の表示状態に戻ります。

4.5.2 ロータリ・ノブの使用法

ロータリ・ノブは、「AMPLITUDE」表示器の数字の下に有るカーソルが点灯している桁以上の出力レベルを増減させます。

カーソルの移動は、**▶◀** キーにより移動させます。

ロータリ・ノブを時計方向に回転させるとレベルは、上昇し、反時計方向に回転させるとレベルは、下降します。

ロータリ・ノブでの設定は、**dB** (**kHz**) 単位キーを設定する必要有りません。

a) 例 46dB から 66dB に変更したい時 (単位は、EMF dB μ とします。)

— は、カーソル位置を示す

キー操作	「AMPLITUDE」表示器
	— 4 6.0
▶◀ 2 度押す。	— 4 6.0
 ロータリ・ノブ を時計方向に 2 ステップ回す。	— 6 6.0

b) 例 66dB から 60dB に変更する時

キー操作

「AMPLITUDE」表示器



1 度押す。

└ 6 6 . 0

└ 6 6 . 0

ロータリ・ノブ

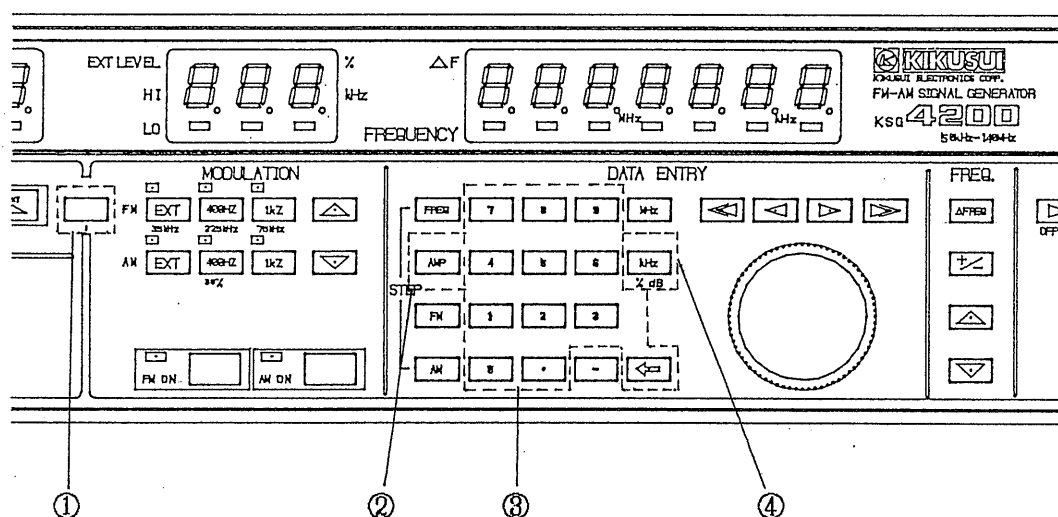
└ 6 0 . 0

を反時計方向に

6 ステップ回す。

4.5.3 出力レベル・ステップ 、 キーの設定法

「AMPLITUDE」、 キーに、任意のステップ値（最小 0.1 dB）を設定し、出力レベルを増減する事が出来ます。



上図に示す ① ② ③ ④ の順番で入力します。

a) 例 46dB の時 、 キーを 2dB に設定する。

キー操作

「AMPLITUDE」表示器

└ 4 6 . 0

2 └ └ └

└ 4 6 . 0

1 度押す

└ 4 8 . 0

2dB ステップで連続上昇、下降可変する時は、「AMPLITUDE」、 キーを押し続けますとリピート機能が動作します。

4.5.4 OFFSETの設定法

アンプのゲイン、ダミー・アンテナの損失、ケーブルの損失等の補正に使用します。

設定法は、**AMP** キー、テン・キー **0~9**、**—**、**YE**、**OFFSET** キーの順番に操作し、出力レベルのオフセット量を設定します。

更に、**YE**、**OFFSET** と操作しますとオフセットされた出力レベルが表示されます。オフセット設定可能な範囲は、 $\pm 50\text{dB}$ です。

a) 例 100 EMF $\text{dB}\mu$ に対して、 -6dB オフセットする場合

キー操作	「AMPLITUDE」表示器	
AMP	100.0	
—	—	
6	—6	
YE OFFSET	100.0	
YE OFFSET	94.0	OFST 表示点灯
オフセットを解除する時		
YE OFFSET	100.0	OFST 表示消灯

4.5.5 出力レベル偏差 **ΔdB** キーの使い方

この機能は、出力レベルの変化量を見るもので受信機の帯域幅、フィルタの減衰特性などの測定に威力を発揮します。

ΔdB キーを押しますと、「AMPLITUDE」表示器の **ΔdB** 表示が点灯します。

ΔdB 機能を解除する場合、もう一度 **ΔdB** キーを押します。

可変出来る範囲は、出力レベルの最大値、最小値の範囲です。

a) 例 54 EMF $\text{dB}\mu$ が設定されている時

キー操作	「AMPLITUDE」表示器	
	54.0	
ΔdB	0.0	ΔdB の表示点灯
 ロータリー・ノブ を反時計方向に 16 ステップ回す		
	—16.0	
ΔdB	38.0	ΔdB 機能の解除

4.5.6 RF・OFF キーの使い方

RF・OFF キーを押しますと、本器の高周波出力信号がオフされると共に、「AMPLITUDE」表示器にも OFF と表示されます。

RF・OFF の状態では出力レベル、単位等の設定も出来ません。

4.5.7 単位キーの設定範囲

- a) EMF dB μ 開放端電圧 $-20\text{dB}\mu \sim 132\text{dB}\mu$

EMF dB μ キーを押しますと、「AMPLITUDE」表示器に単位 (EMF dB μ) が表示されます。

- b) dB μ 負荷端電圧 $-26\text{dB}\mu \sim 126\text{dB}\mu$

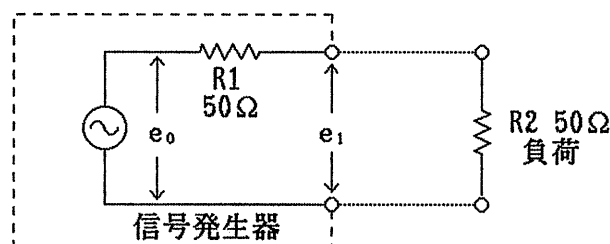
dB μ キーを押しますと、「AMPLITUDE」表示器に単位 (dB μ) が表示されます。

- c) dBm 電力表示 $-133\text{dBm} \sim +19\text{dBm}$

dBm キーを押しますと、「AMPLITUDE」表示器に単位 (dBm) が表示されます。

4.5.8 出力レベルの単位について

本器に使用されている出力の等価回路を次に示します。



- a) EMF dB μ 開放端電圧

上図に示す発生電圧 e_0 を $0\text{dB}\mu = 1\mu\text{V rms}$ で基準化した電圧表示法です。

- b) dB μ 負荷端電圧

上図に示す R_2 を負荷した電圧 e_1 を $0\text{dB}\mu = 1\mu\text{V rms}$ で基準化した電圧表示法です。

- c) dBm 電力表示

上図に示す R_2 に消費される電力を $0\text{dBm} = \sqrt{1\text{mW} \times 50\Omega} = 0.2236\text{V rms}$ で基準化した電力表示法です。

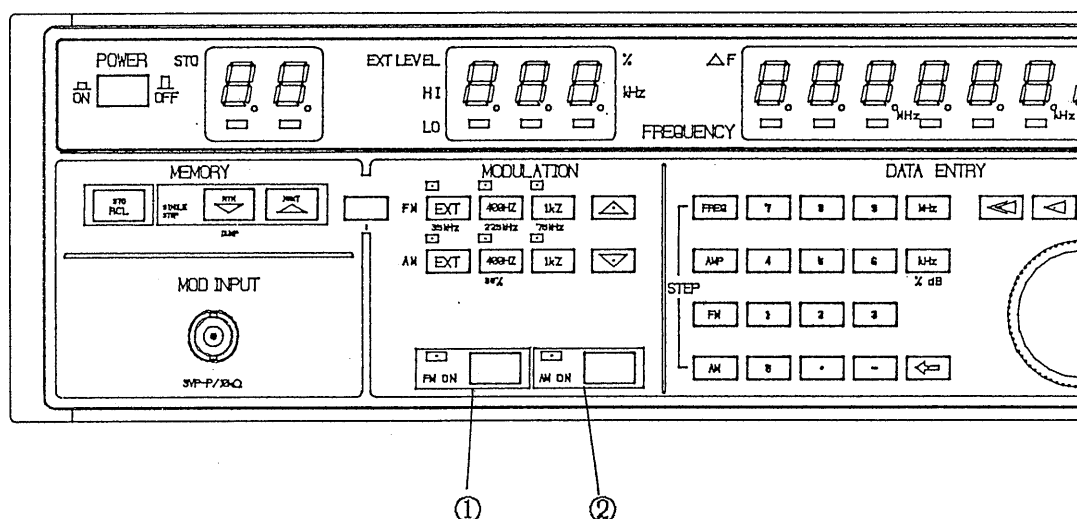
4.6 変調の設定

4.6.1 **[YE]** キーの使用法

- a) **[YE]** **[30%]** キーで AM 変調 30% のセット
- b) **[YE]** **[3.5kHz]** キーで FM 偏移 3.5kHz のセット
- c) **[YE]** **[22.5kHz]** キーで FM 偏移 22.5kHz のセット
- d) **[YE]** **[75kHz]** キーで FM 偏移 75kHz のセット

4.6.2 変調ソースの設定法

変調ソースの切替えキーを押しますと、それぞれに対応する表示器が点灯します。① のキーは、FM 変調の ON/OFF を ② のキーは、AM 変調の ON/OFF を操作するもので、キーを押すごとに ON と OFF が交互に切替わります。



- a) 例 FM の内部変調 400Hz で 75kHz の偏移に設定する時

キー操作

「MODULATION」表示器

[FM 400Hz]

[400Hz] 表示器点灯

××.× 以前に設定された値

[FM]

[kHz] 表示器点灯

[7]

7 . .

[5]

75 .

[kHz]

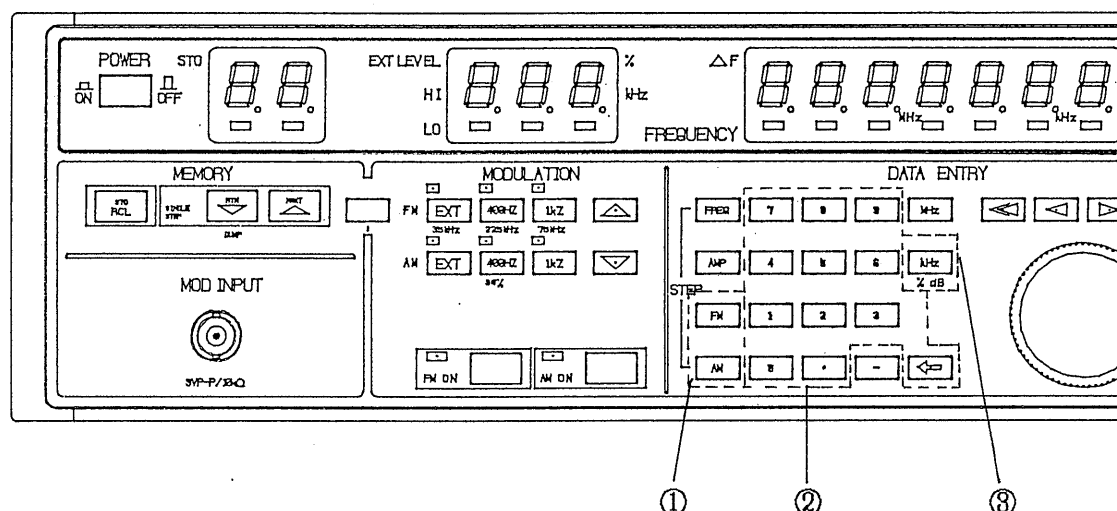
75.0

- b) 例 変調を OFF にする時

①、又は、② のキーを押し、FM ON の表示器が消えた時 OFF となります。

この時の「MODULATION」表示器は、0.0kHz となります。

4.6.3 テン・キーによる設定法



入力は、上図の ① ② ③ の順番に操作します。

まず、「DATA ENTRY」**[FM]**、**[AM]** キーを押しますと、前に設定されている変調度が、「MODULATION」表示器に単位と共に表示されます。

次に、テン・キー **[0~9]** によって、希望の数値を入力します。

テン・キーによる入力が完了した時点で、FM 変調は **[kHz]**、AM 変調の場合は **[%]** (**[kHz]**) キーを押しますと、「MODULATION」表示器に単位と共に設定されます。

テン・キー **[0~9]** からは、任意の値の入力が可能ですが、設定の範囲外の値を入力すると、前の状態の表示になります。

FM 表示の最大偏移、最小偏移の関係は、次の様になっています。

周 波 数	最 大 偏 移	最大偏移
50kHz ~ 2.99999MHz	0 ~ 30kHz	100Hz
3.0MHz ~ 32.4999MHz	0 ~ 99.9kHz	100Hz
32.5MHz ~ 64.9999MHz	0 ~ 50kHz	100Hz
32.5MHz ~ 64.9999MHz	51 ~ 99kHz	1kHz
65.0MHz ~ 140MHz	0 ~ 99.9kHz	100Hz

AM 表示は、最大 99.9%で、分解能 0.1%となっています。

a) 例 FM 25kHzを設定する時

キー操作	「 MODULATION 」 表示器
FM	××.×・・・・ 以前に設定された値 kHz と表示
2	2 ー ー
5	2 5 ー
kHz	2 5 . 0

b) 例 続けて AM 30%に設定する時

キー操作	「 MODULATION 」 表示器
AM	××.×・・・・ 以前に設定された値 % と表示
3	3 ー ー
0	3 0 ー
%	3 0 . 0

4.6.4 「 MODULATION 」 表示器のフラッシング

FM 変調の場合、周波数による規定変調度を越えると、次の 3 種類のいずれかによってエラーとなり変調がかかりません。

改めて変調度を規定値内に直し、ご使用下さい。

1) 変調度を可変し変調度範囲を越えた時

範囲外の変調度入力不可能

2) 周波数を可変し、変化後の周波数が変調度範囲を越えている時

「 MODULATION 」 表示器がフラッシング

3) 2)の場合「 MODULATION 」 表示器が AM の場合

kHz 単位表示がフラッシング

例えば 4.5MHz で 50kHz 偏移とし、周波数を下げて意気 2.99999MHz 以下になると「 MODULATION 」 表示器は、50kHz のままフラッシングします。この時、変調度はゼロとなります。

4.6.5 ロータリ・ノブの使用法

カーソルが「MODULATION」表示器内に無い場合は、、 キーにより、「MODULATION」表示器内に有る場合は、、 キーで移動し、その桁以上の FM 偏移、又は、AM 変調度を増減する事が出来ます。

ロータリ・ノブでの設定は、、 キーを設定する必要有りません。

a) 例 FM 偏移を 25kHz から 35kHz に変更する時

(但し、周波数は、3MHz 以上)

— は、カーソル位置を示す

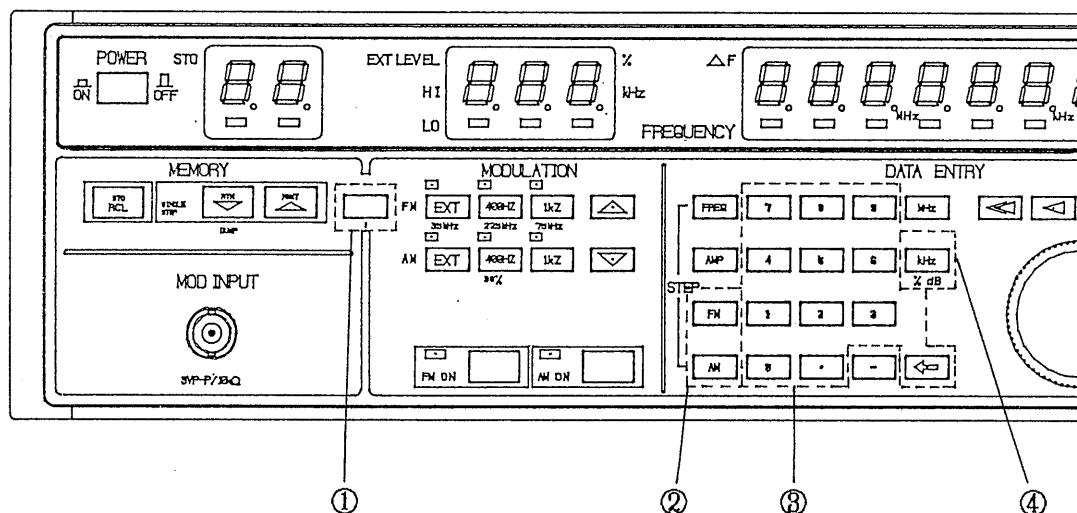
キー操作		「MODULATION」表示器
		2 <u>5</u> .0
 1 度押す。		<u>2</u> 5.0
 ロータリ・ノブ を時計方向に 1 ステップ回す。		<u>3</u> 5.0

b) 例 AM 変調度を 30% から 25% に変更する時

キー操作		「MODULATION」表示器
		<u>3</u> 0.0
 1 度押す。		3 <u>0</u> .0
 ロータリ・ノブ を反時計方向に 5 ステップ回す。		2 <u>5</u> .0

4.6.6 変調ステップ Δ 、 ∇ キーの設定法

「MODULATION」 Δ 、 ∇ キーに、任意のステップ値（最小値 100Hz、又は、0.1%）を設定し、変調を増減する事が出来ます。



上図の ① ② ③ ④ の順番に操作します。

a) 例 FM ステップを 2.5kHz に設定する時

キー操作	「MODULATION」表示器
Δ STEP FM	75.0 kHz 点灯
2	2. . .
	2. . .
5	2.5 .
kHz	75.0
Δ 一度押す	77.5

連続上昇、下降に可変する時は、「MODULATION」 Δ 、 ∇ キーを押し続けますと、リピート機能が動作します。

AM ステップについても FM と同様です。

4.6.7 外部変調信号の接続と設定法

1) 接続と設定法

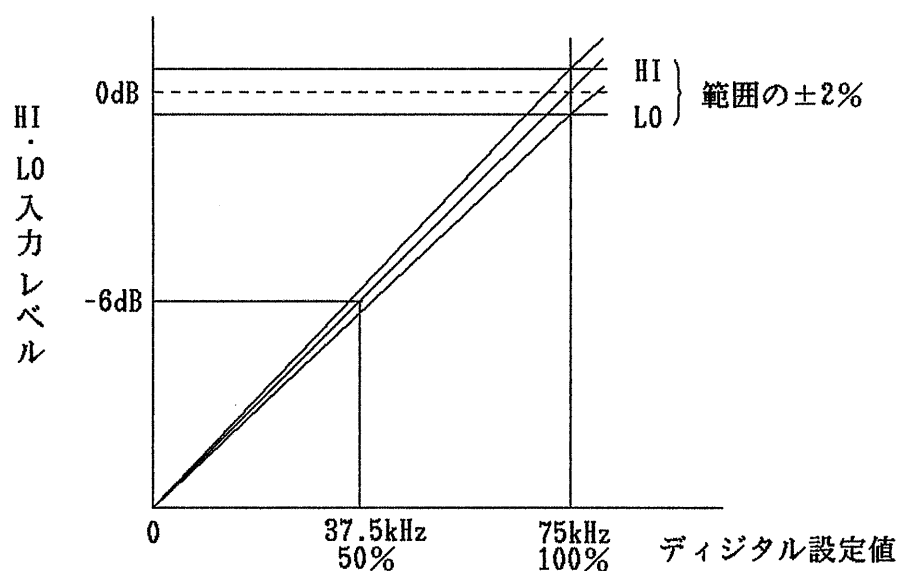
外部変調信号源は、パネル面の入力端子「MOD INPUT」に接続します。

入力インピーダンスは、約 $10k\Omega$ 、適性入力レベルは、約 $3V_{p-p}$ です。

適性入力レベル範囲は、「MODULATION」表示部の **EXT LEVEL** **HI** **LO** 表示が、両方共消える範囲に外部変調信号源のレベルを調整します。外部変調信号源のレベルが低い場合は、**LO** が点灯し、レベルが大きすぎる場合は、**HI** が点灯します。

パネル面の設定を変える度に、外部変調信号源のレベルを調整する必要ありません。

2) 設定範囲の説明



変調入力レベルの関係は、上図のようになっています。

入力レベルを調整し、**HI**、**LO** の範囲に入れると設定値の誤差は、 $\pm 2\%$ の範囲に入ります。この **HI**、**LO** レベルを基準に変調度は、内部でデジタル表示値に設定されます。**HI**、**LO** の範囲は、複合波でも、単信号波でもピーク動作し、図のように入力レベルに対して直線動作します。

例えば、入力レベルを **HI**、**LO** の範囲に設定し、表示を 75kHz 偏移に設定後、入力レベルを $-6dB$ 減衰させると、表示は、 $75kHz = 100\%$ のままで、偏移が $37.5kHz = 50\%$ になります。この時 **LO** のランプが点灯しますが、 $37.5kHz$ 偏移の正常な変調が得られます。又、入力レベルを **HI**、**LO** の適性範囲に設定しますと、**HI**、**LO** のランプが消灯していますが、ステレオ信号発生器の **MAIN**、**LEFT**、**RIGHT**、**SUB** と切替える度に **HI**、**LO** のランプが交互に点灯する場合があります。**HI**、**LO** の範囲が非常に狭いので交互に **HI**、**LO** ランプが点灯する場合でも、大きな誤差にはなりませんので使用上問題ありません。

4.7 メモリーの使用法

4.7.1 メモリーのリコール方法

メモリーは、マトリックス状に配置されています。

即ち、縦に 10 行、横に 10 列、合計 100 ポイント配置されています。

下図に、メモリーの配置図を示します。

「 MEMORY 」 アドレス 2桁 7セグメント 表示									
00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10									.
20									.
30									.
40									.
50									.
60									.
70									.
80									.
90	.	.	.	.	.	.	.	.	99

リコールの基本操作は、**REC** キー、テン・キー **0~9** キーによる行番号の呼び出し、「MEMORY」**△** キーによる列番号の呼び出しの順番になります。

又は、**REC** キー、**△** キーによって「MEMORY」の表示を消灯させ、続いて行、列と 2 桁のテン・キー **0~9** により入力する事で、メモリーを直接呼び出す事も出来ます。

以下に示す例は、周波数、出力、変調等 4.4~4.6 項によって設定され、4.7.2 項のストア操作によって、メモリーされているものとします。

a) 例 メモリー「10」をリコールする場合

	「MEMORY」表示器
REC キー、数値 1 キー	「10」

b) 例 メモリー「43」をリコールする場合

REC キー、数値 4 キー	
「MEMORY」 △ キーを 3 回押す	「43」

c) 例 メモリー「85」をリコールする場合

[[RCL]] キー、数値 [[8]] キー

「MEMORY」[[Δ]] キーを5回押す 「85」

d) 例 メモリー「56」を直接リコールする場合

[[RCL]] キー、[[5]] キーで、「MEMORY」表示器が消灯する。

テン・キーによって [[5]]、[[6]] と入力 「56」

続いて、「78」のリコールをする場合は、RCLキーを省略し、[[5]]
キーで、「MEMORY」表示器が消灯

テン・キーによって [[7]]、[[8]] と入力 「78」

4.7.2 メモリーにストアする方法

4.7.1 項のリコール方法で述べた様に、メモリー・アドレスがマトリックス状に配置されており、パネル面上の殆んどの機能がストア出来ますが、周波数のステップ、出力のステップ、変調度のステップ、ΔFREQの機能、RF ON/OFF は、ストアする事が出来ません。

ストアの基本操作は、周波数、出力レベル、変調レベル、変調の種類等を設定し、[[F]] キー、[[STO]] キー、テン・キー、「MEMORY」[[Δ]] キーの順番に操作します。

又は、[[F]] キー、[[5]] キー によって「MEMORY」表示を消灯させ、続いて2桁の数値を [[0~9]] キーにより入力する事で行、及び列番号に直接ストアする事が出来ます。

a) 例 周波数 1MHz、出力レベル 76 EMF dBμ、内部変調 1kHz、AM 30%をメモリー「10」にストアする場合

① [[FREQ]]	×××.×××.×
[[1]]	1 _ _ _ _
[[MHz]]	_ _ 1.000.0

又は、ロータリ・ノブ、「FREQUENCY」[[Δ]]、[[V]] キーを使い、周波数を設定する。

②	AMP	× × × ×
	7	7 _ _ _
	6	7 6 _ _
	dB	_ 7 6 . 0

又は、ロータリ・ノブ、「AMPLITUDE」 Δ 、 ∇ キーを使い、出力レベルを設定する。

③	AM、1、kHz	× × . ×
	YE、30、%	3 0 . 0 %

又は、テン・キー 0~9、変調モード・キーを使い、変調レベル、モードを設定する。

以上の設定で YE キー、STO キー（STO 緑色表示点灯）、数値 11 で、メモリー「10」にストアされます。

b) 例 メモリー「13」に、別の項目をストアする時

「MEMORY」表示器

- ① RCL、1、 Δ 2 度押す 「12」にする。
- ② 周波数、出力、変調等を設定する。
- ③ YE、STO、 Δ キーを押し 「13」となり、メモリー「13」に、②の状態がストアされます。

c) 例 メモリー「45」にストアする場合

- ① 周波数、出力、変調等を設定する。
- ② YE、STO、 Δ キーで「MEMORY」表示器消灯
- ③ テン・キーによって 4、5 と入力し、①の状態がストアされます。

【注 1】 連続してストアする場合、YE、STO、 Δ キーは、省略出来ません。

【注 2】 4.7.3 項（33頁）の R/TN キーは、この直接ストア方式で、ストアする事は出来ません。

4.7.3 メモリーの全アドレスにストアしない場合

(**RTN** キーの設定法)

- a) 例 メモリー・アドレスを「10」→「11」→「12」→「13」→「10」→
「11」と変えたい場合

キー操作

「MEMORY」表示器

RCL、**1**、及び **Δ** キーを 「13」

3 度押す

YE、**STO**、**RTN**

「14」 リターン命令が入力
されます。

【 使用 法 】

RCL、**1**

「10」 1 つ目のメモリー

Δ

「11」 2 つ目のメモリー

Δ

「12」 3 つ目のメモリー

Δ

「13」 4 つ目のメモリー

Δ

「10」 1 つ目のメモリー

に戻ります。

4.7.4 **RTN** キーの解除法

二つの方法があります。

- 1) **RCL**、**9**、**1**、**9** キーにより 「19」 とする。

YE、**STO**、**V** キーを押す 「19」

メモリー・アドレスは、前の状態の 10 ステップに戻ります。

- 2) **RCL**、**1**、**Δ** キー 3 度押す 「13」 とする。

YE、**STO**、**Δ** キーを押す 「14」 に RTN がストア

” .. されます。

” ..

” ..

” ..

YE、**STO**、**Δ** キーを 5 回押すと 「19」

次々と RTN が送られ、メモリー・アドレスは、前の状態の 10 ステップ・
ブロックに戻ります。

4.7.5 リコールするメモリーを10ステップ以上連続して使用する場合 (**NEXT** キーの設定法)

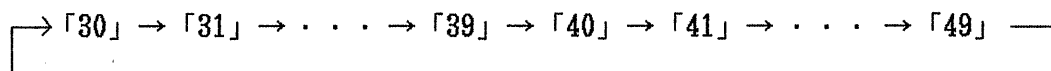
通常、リコール出来るメモリーのステップは、10ステップ (00～09、10～19、……、90～99) ですが、次の操作によって、更に 10ステップ単位で増やす事が可能になります。

「 MEMORY 」表示器を列番号「 9 」とし、続けて **YE**、**STO**、**NEXT** キー操作によって、次の 10 ステップを続けてリコールする事が出来ます。

a) 例 メモリー「30」～「49」を、連続してリコール出来る様にする。

キー操作	「 MEMORY 」表示器
×	「 39 」 前の表示状態
YE	「 39 」
STO	「 39 」 STO LED 点灯
NEXT (△)	「 40 」 STO LED 消灯

リコール動作は、次の様な動作を繰り返します。



4.7.6 **NEXT** キーの解除法

「 MEMORY 」表示器を解除したいメモリー (「09」、「19」、……、「89」) のいずれかに設定し、**YE**、**STO**、**RTN** (▽) キーの順に操作します。

a) 例 メモリー「30」～「49」の 20 ステップを連続してリコール出来る動作を、「30」～「39」、「40」～「49」のブロック動作に戻す場合。

キー操作	「 MEMORY 」表示器
×	「 39 」 前の表示状態
YE	「 39 」
STO	「 39 」 STO LED 点灯
RTN (▽)	「 39 」 STO LED 消灯

4.7.7 同一機種へのメモリー・コピー

- 1) マスターとして、ストアした周波数の設定等の 100 ポイント・メモリーを、他の同一機種へコピーする事が出来ます。
- 2) メモリー・コピーは、以下の手順で操作します。
 - ① それぞれの機器の電源を ON にします。
 - ② マスターとスレーブの各機器のリモート・コントロール端子を、DUMP ケーブルで接続します。
 - ③ マスターのキー操作は、**YES**、**DUMP** (▽) でコピーが始まります。

【注】 DUMP ケーブルは、アンフェノール・タイプ 14 ピン・コネクタを使用します。14 ピンの内ピン番号 8～10 は、接続しませんが、その他のピンは、全部接続します。

別売DUMP用ケーブルSA510形

5. リモート・コントロール

5.1 概 説

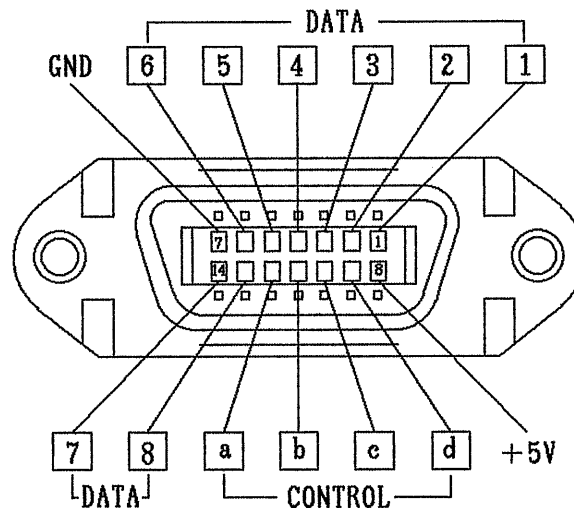
5.1.1 概 要

本器は、リモート・コントロールの為に 14 ピン・コネクタを備えています。
正面パネル操作と同等のコントロールが出来ます。

5.2 使 用 法

5.2.1 リモート・コントロール・コネクタの説明

背面パネルから見たコネクタのピン接続は、第 5-1 図のようになっています。



第 5-1 図

各端子の説明

下記の説明で “ 1 ”、“ 0 ”は、TTL レベルの High レベル、Low レベルです。

- 1) DATA 端子 ①②③④⑤⑥ 1~6、13、14 ピン
DATA 端子は、本体パネルのバスに接続され、入出力に使用出来る双方向性バスになっています。

【注】 DATA 端子は、双方向性の為 DATA ①②③④⑤⑥ のラインに直接 “ 0 ”、
又は、“ 1 ” のデータを加えますと、本体は、動作しません。

- 2) CONTROL 端子 11、12 ピン

④⑤ DATA STROBE 出力端子 12 ピン

通常 “ 1 ” で、データを読み取る時 “ 0 ” が出力されます。

⑥⑦ REQUEST TO READ 入力端子 11 ピン

通常 “ 1 ” で、“ 0 ” の時データを読む事を要求する端子。

- 3) CONTROL 端子 9、10ピン

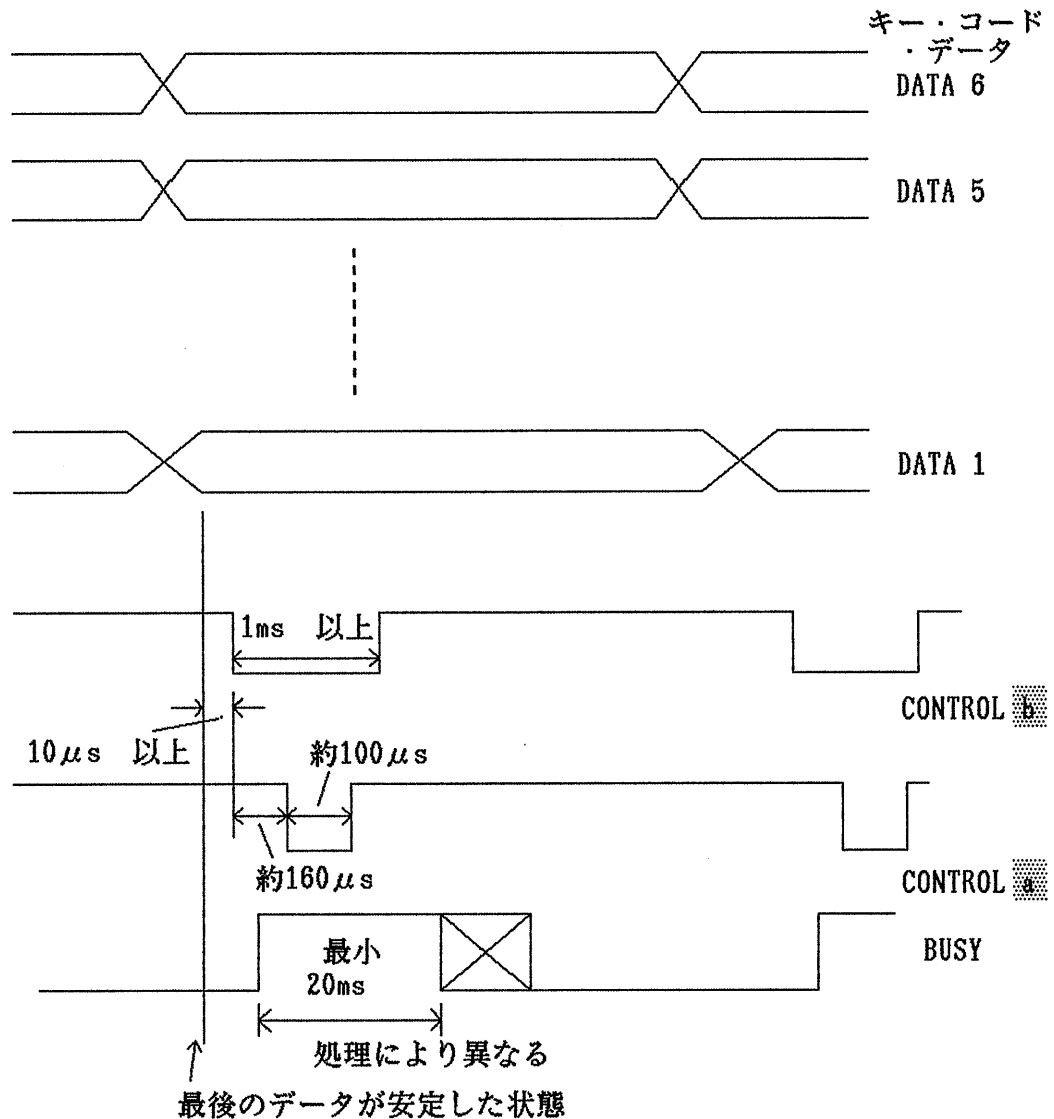
⑧⑨⑩ 表示コントロール出力端子

⑧、又は、⑨ が “ 1 ” の時、データに関する処理中を示します。

即ち、 と  の論理和は、外部機器への BUSY 信号となります。

- 4) +5V 端子 8 ピン
リモート・コントロール用電源 最大 100mA、LED 2 桁点灯位
- 5) GND 端子 7 ピン

5.2.2 入力データのタイミング



第 5-2 図

第 5-2 図の様に BUSY 信号が“0”の時、キー・コード・データ DATA 1～6 を設定し、DATA 1～6 で最後に設定したデータが安定した状態から、10 μ s 以上の時間を置き CONTROL  の信号を 1ms 以上“0”にします。

CONTROL  の信号の立下りから約 160 μ s 後に、約 100 μ s 幅の“0”レベルの CONTROL  の信号が出力されます。

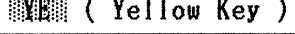
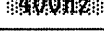
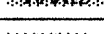
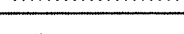
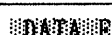
この約 100 μ s の間に、設定されたキー・コード・データを読み込んで処理します。

一方、CONTROL  の信号の立下りと CONTROL  の信号の立下りの間（約 160 μ s）に、キー・コード・データの処理中を表す BUSY 信号が“1”に立ち上ります。

BUSY 信号が“0”になってから、次のキー・コード・データを入力します。

5.2.3 パネル面キー・コード表

パネル面のキーは、全てコード化されており、表 5-1 のキー・コード・データを設定し、CONTROL  信号を“0”にする事により、パネル面のキーを一つ押した事と同様になります。

キーの名称	DATA 入力ピン番号					
	6	5	4	3	2	1
	MSB ← Key Code → LSB					
	1	0	1	1	1	1
  / 	0	0	0	1	0	0
”  / 	0	0	0	1	1	1
”  / 	0	0	0	1	1	0
	0	1	1	0	1	1
 	0	0	1	0	0	1
” 	0	0	1	0	1	1
” 	0	0	1	1	0	0
 	0	1	1	1	0	0
” 	0	1	1	1	0	1
” 	0	1	1	1	1	0
 	1	0	1	0	1	0
” 	0	1	1	1	1	1
	0	0	1	1	1	0
	0	0	1	1	1	1
	0	1	0	0	1	0
” 	0	1	0	0	1	1

次頁に続く

表 5-1

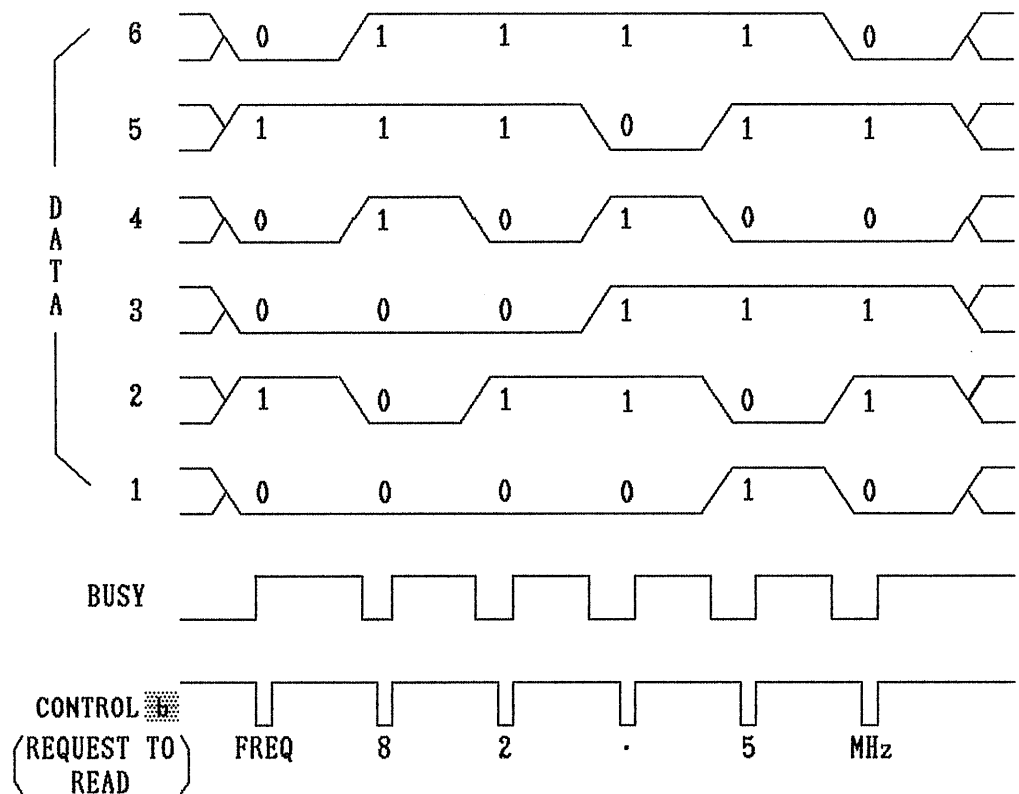
キーの名称	MSB ← Key Code → LSB					
DATA ENTRY FM / STEP FM	0	1	0	1	0	0
” AM / STEP AM	0	1	0	1	0	1
” 0	1	1	0	0	0	0
” 1	1	1	0	0	0	1
” 2	1	1	0	0	1	0
” 3	1	1	0	0	1	1
” 4	1	1	0	1	0	0
” 5	1	1	0	1	0	1
” 6	1	1	0	1	1	0
” 7	1	1	0	1	1	1
” 8	1	1	1	0	0	0
” 9	1	1	1	0	0	1
”	1	0	1	1	1	0
”	1	0	1	1	0	1
”	0	0	1	0	0	0
” MHz	0	1	0	1	1	0
” kHz、%、dB	1	0	0	1	0	1
”	0	1	0	1	1	1
”	1	1	1	1	0	0
”	1	1	1	1	1	0
”	0	1	1	0	0	0
” ロータリ・ノブ UP	0	0	0	0	0	0
” ” DOWN	0	0	0	0	0	1
FREQUENCY FREQ	1	1	1	1	0	1
” /	1	0	1	0	0	1
”	0	1	1	0	0	1
”	0	1	1	0	1	0
AMPLITUDE	1	0	0	0	0	1
” dB	1	0	0	0	1	0
” dB	1	0	0	0	1	1
” OFF	1	0	0	1	0	0
”	1	0	0	1	1	0
”	1	0	0	1	1	1
” ロータリ・ノブ UP	0	0	0	1	0	0
” ” DOWN	0	0	0	0	1	1

表 5-1

5.2.4 外部コントロールで周波数をセットする例

周波数 82.5MHz をセットする例

- 1) パネル面キー・コード表より、FREQ コード（表 5-1）“010010”を設定します。
- 2) CONTROL  を入力データのタイミング（第 5-2 図）の様に 1ms 以上 “0” を送ります。
- 3) 第 5-3 図の様に、キー・コード表よって 82.5 のデータを設定し、CONTROL  を 1ms 以上送ります。



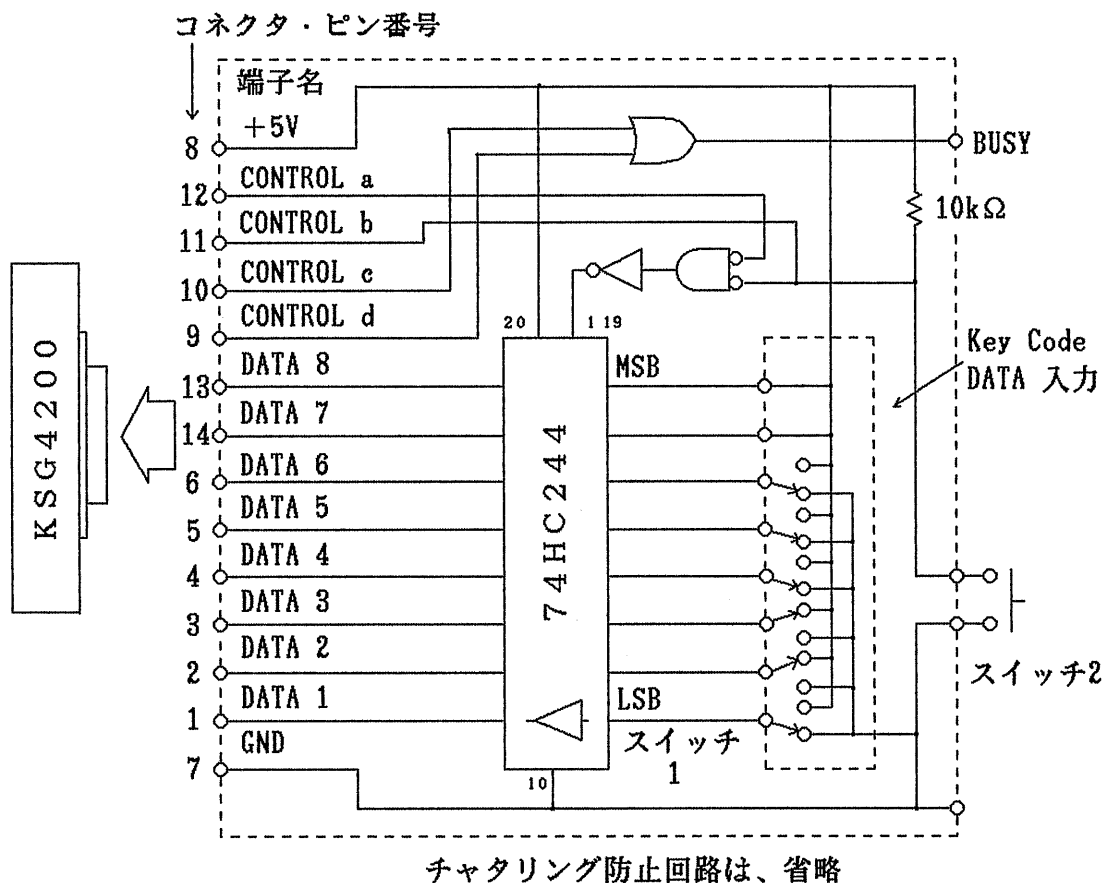
第 5-3 図

- 4) 最後に MHz のデータ “010110” と CONTROL  信号を送り、データ転送が終了します。
- 5) 最後の MHz のデータ “010110” と CONTROL  信号を送った時点から、本体の内部で周波数の処理が開始されます。

5.2.5 リモート・コントロール回路図例と動作説明

リモート・コントロール用コネクタのデータ・ラインは、前述の様に双方向性バスの為、外部よりコントロールする時は、第 5-4 図の様な回路を使用する事をお奨めします。

第 5-4 図は、スイッチを 1 回押す事に、メモリー・アドレスの表示を一つづつステップ送りさせるリモート・コントロール回路です。



第 5-4 図

キー・コード・データ入力スイッチ1により、キー・コード表（表5-1）のメモリー・リコール△のデータを設定し、CONTROL  を“0”にする（スイッチ2を押す）と、約160μs後にCONTROL  が“0”になり74HC244のEnable A、B（1ピン、19ピン）を“0”に下げ、メモリー・リコール△のデータをCONTROL  が“0”になっている約100μsの間、本体に取り込み処理します。

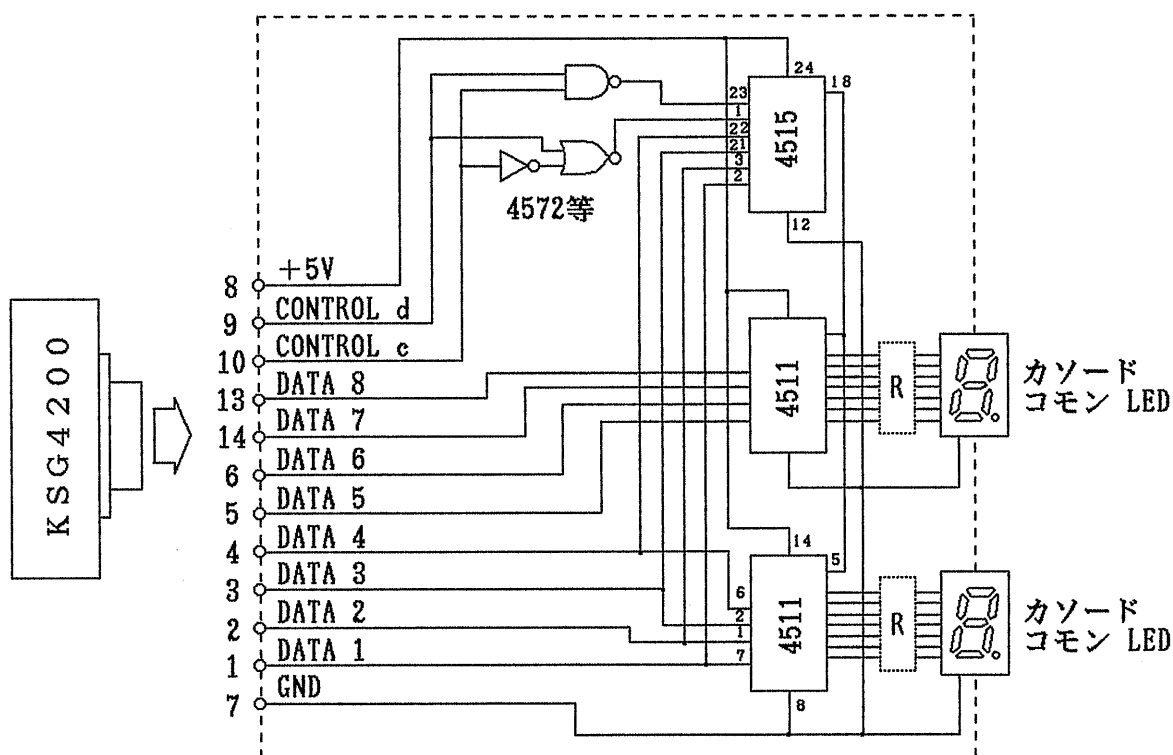
スイッチ1のキー・コード・データをキー・コード表の別のキー・コード・データに変える事により、パネル面の他の任意のキーをコントロールする事が出来ます。

第 5-4 図を基に、外部リモート・コントロールをコンピュータ等で行う時には、必ず BUSY 信号が “ 0 ” となっている事を確認後、CONTROL 端子を 1ms 以上 “ 0 ” にします。

【 注 】コントロール端子の DATA 端子は、8 ビットなので 7 ビット目（ 14 ピン ）と 8 ビット目（ 13 ピン ）は、74HC244 を介して固定データ “ 1 ” を送ります。

5.2.6 「 MEMORY 」表示器の出力回路例

第 5-5 図に例を示します。



第 5-5 図

リモート・コントロール端子は、双方向性バス構造ですので、本体の「 MEMORY 」表示器と同様に第 5-5 図の回路で出力する事も出来ます。

又、CMOS 4511 の代りにラッチを使用しますと、「 MEMORY 」表示器のデータを使用する事も出来ます。

第 5-4 図と第 5-5 図をコネクタ部で並列接続しますと、外部からコントロールする事が出来ると同時に、内部の「 MEMORY 」の表示、又は、データ等の確認に使用する事が出来ます。

6. 出力インピーダンス、ダミー・アンテナ等の切替信号

6.1 「 RANGE OUTPUT 」 RCAピン・コネクタ

周波数が 35.0000MHz～140MHz の時 “ 1 ” 動作となり、電圧 5V、電流 50mA の出力が得られ、50kHz～34.9999MHz の時 “ 0 ” 動作となります。

出力インピーダンス切替器、カー・ラジオ用ダミー・アンテナ等のコントロール信号として、使用する事が出来ます。

電流 50mA は、リード・リレー 2 個を駆動する為の電流です。

7. バック・アップ電池、CPUのリセットについて

本器は、メモリー記憶用のバック・アップ電池を使用していますので、本器を長期間使用しない場合は、バック・アップ電池が放電している場合があります。

本器は、充電回路を備えていますので本器の電源を入れ、充分充電して下さい。

又、メモリー用バック・アップ電池は、周囲温度・湿度・保存条件等によって、大きく影響を受けます。

5 年位使用しても放電容量は、90%位です。

この状態でも充分使用出来ますが、不良になった場合は、三洋電機(株)の CADNIC BACKUP N-SB3、又は、日本電池(株) GB 50H-3Xと交換して下さい。

【 電池の取付け位置と交換方法 】

本器の上蓋を取り外しますと、アルミ・サッシ・ケースが 5 個見えます。

この内、左側面に取付けて有るアルミ・サッシ・ケース中に CPU のプリント基板が有り、電池は、この基板上に実装されています。

新しい電池と交換する場合は、アルミ・サッシ・ケースを止めている左側面 2 本のビスを外し、アルミ・サッシ・ケースを取り外して、プリント基板を引き出し電池を交換して下さい。

尚、電池の交換が済みましたら、アルミ・サッシ・ケースをかぶせ、2 本のビスを止めた後、 キーを押しながら電源スイッチを ON にし、CPU の初期設定 (イニシャル・セット) を行って下さい。

【注】 ハード・リセット、ソフト・リセットを行った後、パネル面のキー入力待ちとなっておりますので、一度  キー等を押してからご使用下さい。

GP-IB 動作がしない事が有ります。

8. GP-IB

8.1 概 説

8.1.1 概 要

本器は、IEEE 488 標準インターフェース・バスによって制御される GP-IB インターフェース機能です。

8.1.2 特 長

- 1) IEEE 488 標準インターフェース・バスによって、信号発生器のリسن機能を制御する事が出来ます。
- 2) 「REMOTE」表示器により、リモート状態を確認出来ます。
- 3)  キーを押す事により、いつでもローカルに設定出来、パネル面より手動操作が出来ます。
(ローカル・ロック・アウトの状態では、手動操作出来ません。)
- 4) 本器に設定されているデバイス・アドレスを「AMPLITUDE」表示部で確認する事が出来ます。

8.2 性 能

8.2.1 インターフェース機能

SH0	: 送信ハンド・シェーク機能	無
AH1	: 受信ハンド・シェーク機能	有
T0	: トーカ機能	無
L1	: リスナ機能	有
	リスン・オンリー・モード	有
SR0	: サービス・リクエスト機能	無
RL1	: リモート・ローカル機能	有
	ローカル・ロック・アウト機能	有
PP0	: パラレル・ボール機能	無
DC1	: デバイス・クリア機能	有
	セレクト・デバイス・クリア機能	有
DT0	: デバイス・トリガ機能	無
C0	: コントローラ機能	無

- #### 8.2.2 インターフェース・システムに関する電氣的仕様
- IEEE Std 488-1975 に準ずる。

8.3 使用法

8.3.1 使用前の準備

電源スイッチを入れ、GP-IB のデバイス・アドレスを確認します。

- 1) GP-IB のデバイス・アドレスは、**VIEW** キーに続けて **LOCAL** キーを押している間、「AMPLITUDE」表示部に「07」と表示されます。
- 2) デバイス・アドレスを変更する場合は、8.3.2 アドレス設定法に従って、設定して下さい。
- 3) 電源 OFF の状態で、GP-IB ケーブルを接続します。

8.3.2 アドレス設定法

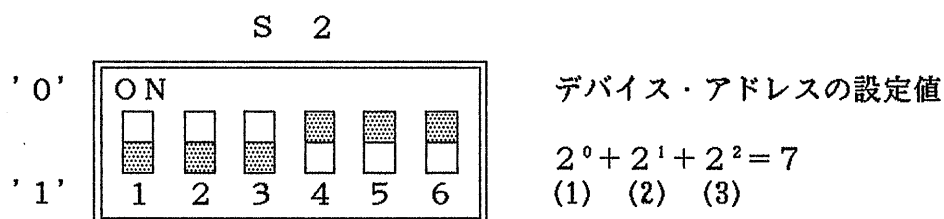
本器のアドレスは、出荷時に「07」に設定して有ります。

アドレス・スイッチは、本体内部 CPU ボード上に実装して有り、アドレスを設定する時は、本体上蓋、シールド板を取り外し、パネル面より見て左側アルミ・サッシ・ケース内に実装されている基板 90-SIG-90102 のボード上のアドレス・スイッチ S2 を操作し、希望のアドレスに設定します。

アルミ・サッシ・ケースの取り外し方は、左側の 2 本のネジ、RF 接栓固定用アングルを取り外し、ケースを持ち上げ、基板を後方に引き抜きます。アドレスを設定後、元の位置に戻します。

この時 CPU のリセット（7.43 頁参照）を行って下さい。

- 1) DIP-SW とアドレス設定値の関係は、表 8-1（46 頁）に示します。
- 2) DIP-SW を ON の側に切替えると“0”のレベルになります。
- 3) 下図の状態は、アドレスが「07」に設定されている図を示しています。



第 8-1 図

表 8-1

リスナ・アドレス	アドレス・スイッチ
デバイス番号	1 2 3 4 5 6
00	000000
01	100000
02	010000
03	110000
04	001000
05	101000
06	011000
07	111000
08	000100
09	100100
10	010100
11	110100
12	001100
13	101100
14	011100
15	111100
16	000010
17	100010
18	010010
19	110010
20	001010
21	101010
22	011010
23	111010
24	000110
25	100110
26	010110
27	110110
28	001110
29	101110
30	011110
リスン・オンリー	*****1

出荷時設定

DIP SW

1 : OFF側 0 : ON側

8.3.3 使用可能な制御コマンド、及びバス・ライン・コマンド一覧

表 8-2

制御コマンド、及び バス・ライン・ コマンド (HP BASIC の場合)	内 容
OUTPUT	リスナ・アドレスを指定し、プログラム・データを送ります。
REMOTE	リスナ・アドレスを指定すると、本体パネル面の「REMOTE」表示器（赤色）が点灯し、データを受け取る準備が出来ます。 この状態の時、本体パネル面の  キーを押すと表示器が消灯し、ローカル状態に戻り、パネル面の全ての手動が可能になります。
LOCAL LOCKOUT	ユニバーサル・コマンドで、GP-IB 上の全ての機器に対して LOCAL LOCKOUT を送ると、本体パネル面からの一切の手動操作が不可能になります。
LOCAL	「REMOTE」表示器が消灯し、ローカル状態に戻り、パネル面から手動操作が可能になります。
CLEAR	電源を OFF にし、又、電源を ON にした状態と同じになります。

【注】 制御コマンド、バス・ライン・コマンドは、ご使用になるコンピュータによって異なりますので、それぞれの説明書を参照して下さい。

8.3.4 プログラム・コード表

KSG4200のプログラムは、表 8-3 の各ファンクション設定法によって設定します。

又、アルファベット順のプログラム・コード表は、表 8-4、ファンクション別のコード表、表 8-5 も合わせて参照して下さい。

又、コントロール・プログラムを作成する上でプログラム・コードの設定順番は、パネル面の操作手順と同じ順にコマンドを送って下さい。

表 8-3

GP-IB 各ファンクション設定法

設 定 項 目	プログラム・コード	データ	単 位
周 波 数	FR	〇〇.〇	HZ、KZ、MZ
出力単位			
EMF dB μ	EM	----	----
dB μ	DU	----	----
dBm	DM	----	----
出力レベル	AP	〇〇.〇	DB
〃 OFF	R0	----	----
〃 ON	R1	----	----
変調度			
AM変調度	AM	〇〇.〇	PC
〃	AM	〇〇.〇	%
AM変調 OFF	AMS5	----	----
FM変調度	FM	〇〇.〇	KZ
FM変調 OFF	FMS5	----	----
外部変調 ON	S1AM、S1FM	----	----
内部変調 400Hz	S2AM、S2FM	----	----
〃 1kHz	S3AM、S3FM	----	----
メモリー			
メモリー・リコール	RC	〇〇	----
〃 ・ストア	ST	〇〇	----

- 【注】 1. ----は、必ずしも必要でないものです。
2. データの〇〇は、1桁から最大設定出来る桁まで有効です。
3. データは、整数か実数で E ホーマット形式は、使用出来ません。
4. 英字には、小文字も使用出来ます。

表 8-4

GP-IB プログラム・コード

アルファベット順

プログラムコード	内 容	コ メ ン ト
AM	振幅変調	ファンクション・モード
AP	出力レベル	〃
DB	〃 dB	単 位
DU	〃 dB μ	ファンクション・モード
DM	〃 dBm	〃
EM	〃 EMF dB μ	〃
FM	周波数変調	〃
FR	周 波 数	〃
HZ	Hz	単 位
KZ	kHz	〃
MZ	MHz	〃
PC	変調度パーセント	〃
RC	メモリー・リコール	ファンクション・モード
RO	出力 OFF	〃
R1	〃 ON	〃
S1	外部変調 ON	変調信号源切換
S2	内部変調 400Hz	〃
S3	〃 1kHz	〃
S5	変調 OFF	〃
ST	メモリー・ストア	ファンクション・モード
0~9	数値	デー タ
-	マイナス符号	〃
.	デシマル・ポイント	〃
%	変調度パーセント	単 位

表 8-5

GP-IB プログラム・コード

ファンクション別	
ファンクション	プログラム・コード
周 波 数	FR
出力レベル	AP
EMF dB μ	EM
dB μ	DU
dBm	DM
出力 OFF	R0
〃 ON	R1
変調	
振幅変調 (AM)	AM
周波数変調 (FM)	FM
外部変調 ON	S1
内部変調 400 Hz	S2
内部変調 1 kHz	S3
変調 OFF	S5
データ	
数値	0~9
マイナス符号	-
デシマル・ポイント	.
単位	
MHz	MZ
kHz	KZ
Hz	HZ
dB	DB
%	PC、又は、%
メモリー	
メモリー・リコール	RC
メモリー・ストア	ST

8.3.5 基本的なデータ設定法

周波数 100MHz、出力レベル EMF 120dB μ 、内部変調 1kHz、FM変調 75kHz を設定する。

下記の例は、HP9816 の例です。

例 1 : OUTPUT 707 ;"FR100MZ,EMAP120DB,S3FM75KZ"

出力コマンド	周波数	出力レベル	FM変調
	データ	データ	データ

通常、CRLF が送信される。

又は、EOI でも良い。

例 2 : 又は、各データごとに送る。

OUTPUT 707 ;"FR100MZ"

OUTPUT 707 ;"EMAP120DB"

OUTPUT 707 ;"S3FM75KZ"

以下、各ファンクションの例題を記載する。

例 3 : 周波数を 88.2MHz に設定する時

a) "FR88.2MZ"

例 4 : 出力レベルを EMF dB μ で 120dB に設定する時

a) "EM,AP120DB"

b) "EM"、"AP120DB"

例 5 : 出力レベルを dB μ で 100dB に設定する時

a) "DU,AP100DB"

b) "DU"、"AP100DB"

例 6 : 出力レベルを dBm で -3.5dB に設定する時

a) "DM,AP-3.5DB"

b) "DM"、"AP-3.5DB"

例 7 : 内部変調 400Hz、AM 30%に設定する時

a) "S2AM30%"

b) "S2AM30PC"

例 8 : 外部変調 FM 75kHz に設定する時

a) "S1FM75KZ"

b) "S1FM"、"FM75KZ"

【注】 S1 のみは、無効。

例 9 : 変調を OFF にする時

a) "AMS5"

b) "FMS5"

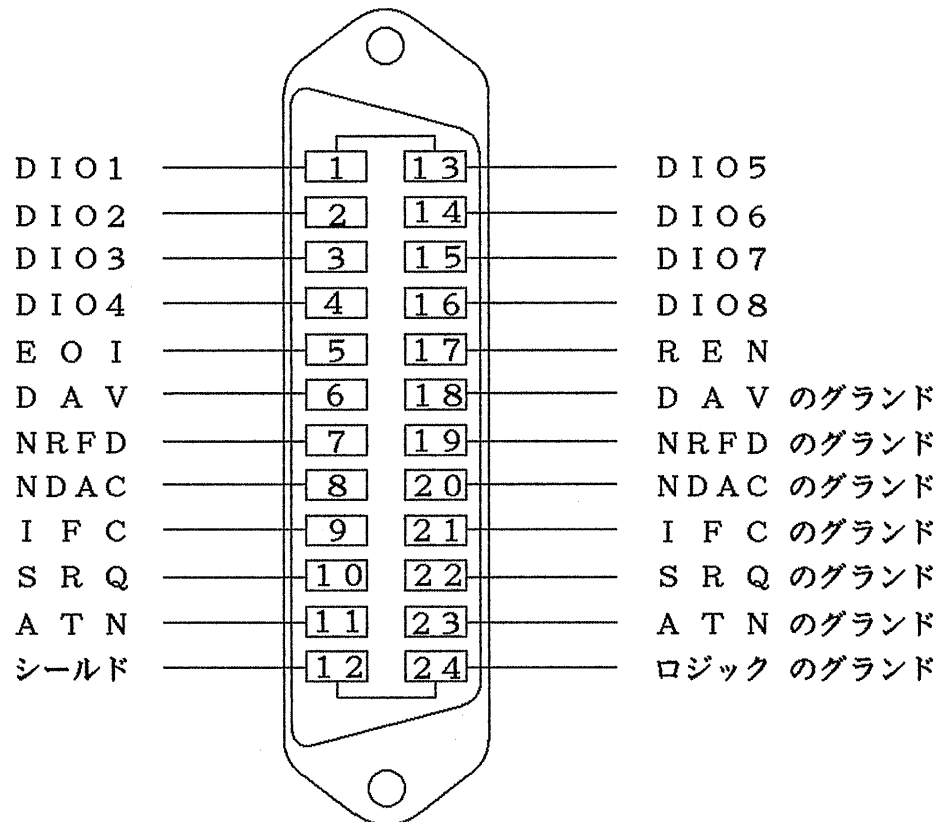
例10 : メモリー・リコールとストア

メモリー・アドレス「36」のリコールとストア

a) "RC36"

b) "ST36"

8.3.6 コネクタ・ピン配列



第 8-2 図

8.3.7 参考資料（プログラム例）

参考資料として、HP9816 における周波数、出力レベル、変調度を設定後、本器のメモリー「00」～「09」にストアし、リコールするプログラム例を示します。

このプログラムが最良のものでは有りません。

コントロールするシステムによって記述方法も異なりますので、システムに合った方法でコントロールして下さい。

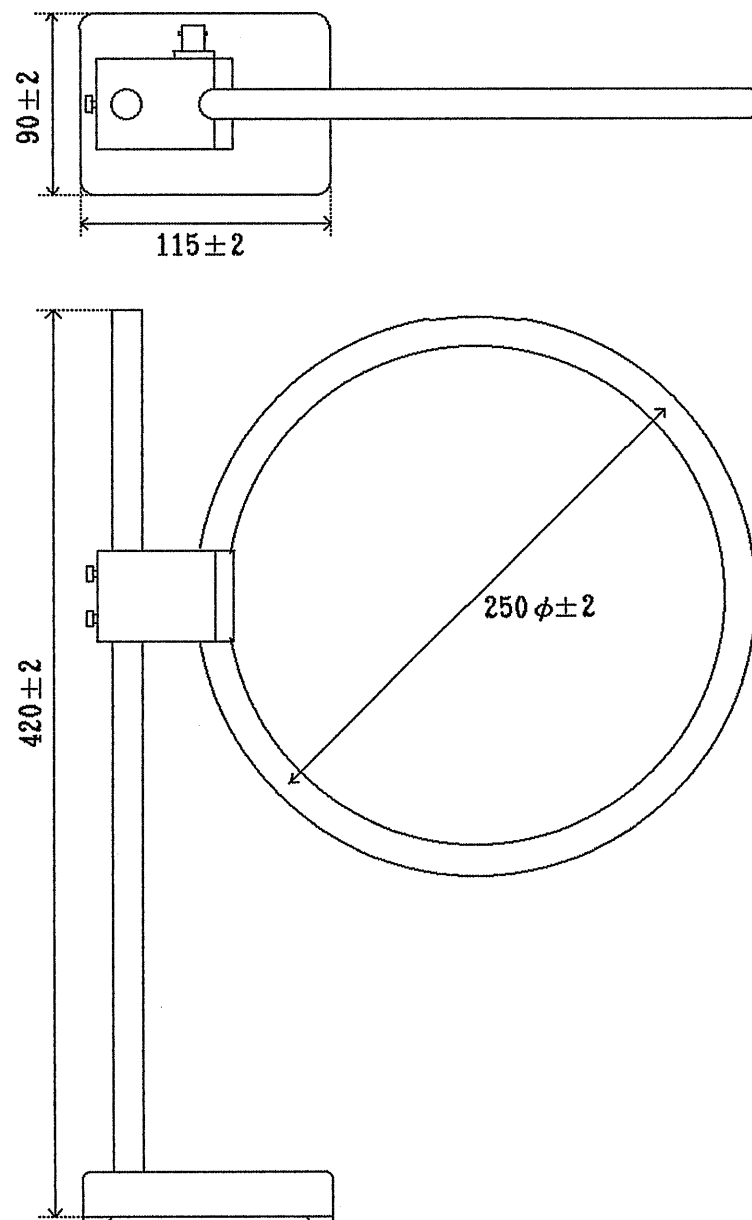
10	Dev=707	インターフェース・セレクトコード*100+デバイス・アドレス
20	Frequency=100*1.E+6	100000000Hz
30	Freqstep=10*1.E+6	10000000Hz
40	Level=120	120dB
50	Levelstep=-10	-10dB
60	Fm=75	75kHz
70	Fmstep=-5	-5kHz
80	CLEAR Dev	セレクト・デバイス・クリア
90	WAIT 2	
100	OUTPUT Dev;"R1"	出力レベル ON
110	OUTPUT Dev;"AMS5"	AM 変調 OFF
120	FOR N=0 TO 9	
130	Freq=Frequency+Freqstep*N	
140	Lev=Level+Levelstep*N	
150	Fmlev=Fm+Fmstep*N	
160	OUTPUT Dev;"FR";Freq/1.E+6;"MZ"	周波数のセット
170	OUTPUT Dev;"EMAP";Lev;"dB"	出力のセット
180	OUTPUT Dev;"S2FM";Fmlev;"kZ"	内部 400Hz、FM 変調度セット
190	OUTPUT Dev;"ST";N	メモリー・ストア
200	NEXT N	
210	FOR N=0 TO 9	
220	OUTPUT Dev;"RC";N	メモリー・リコール
230	WAIT 2	
240	NEXT N	
250	END	

9. アクセサリ（オプション）

9.1 SA100テスト・ループ

1) 性能

周波数範囲	100kHz～30MHz
移動距離	垂直 約250mm 水平 360°
入力ケーブル	同軸形 50Ω
テスト・ループ	直径 250mm 0.8φ 1回巻

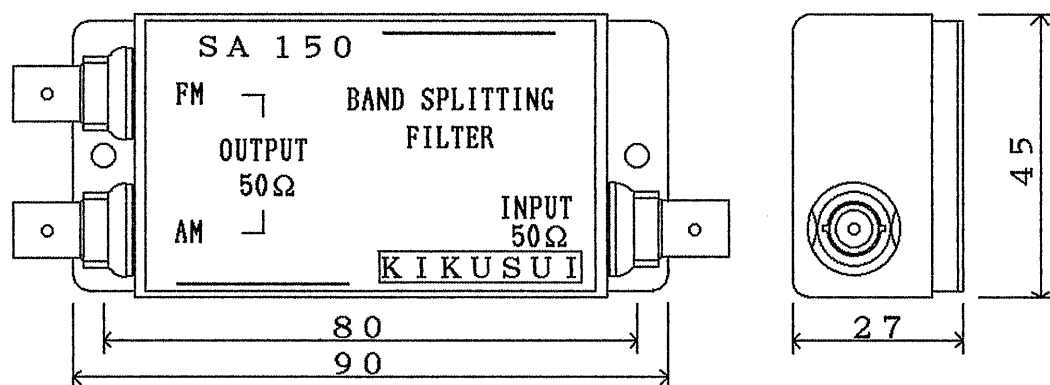


第 9-1 図 外形図

9.2 SA150分波器

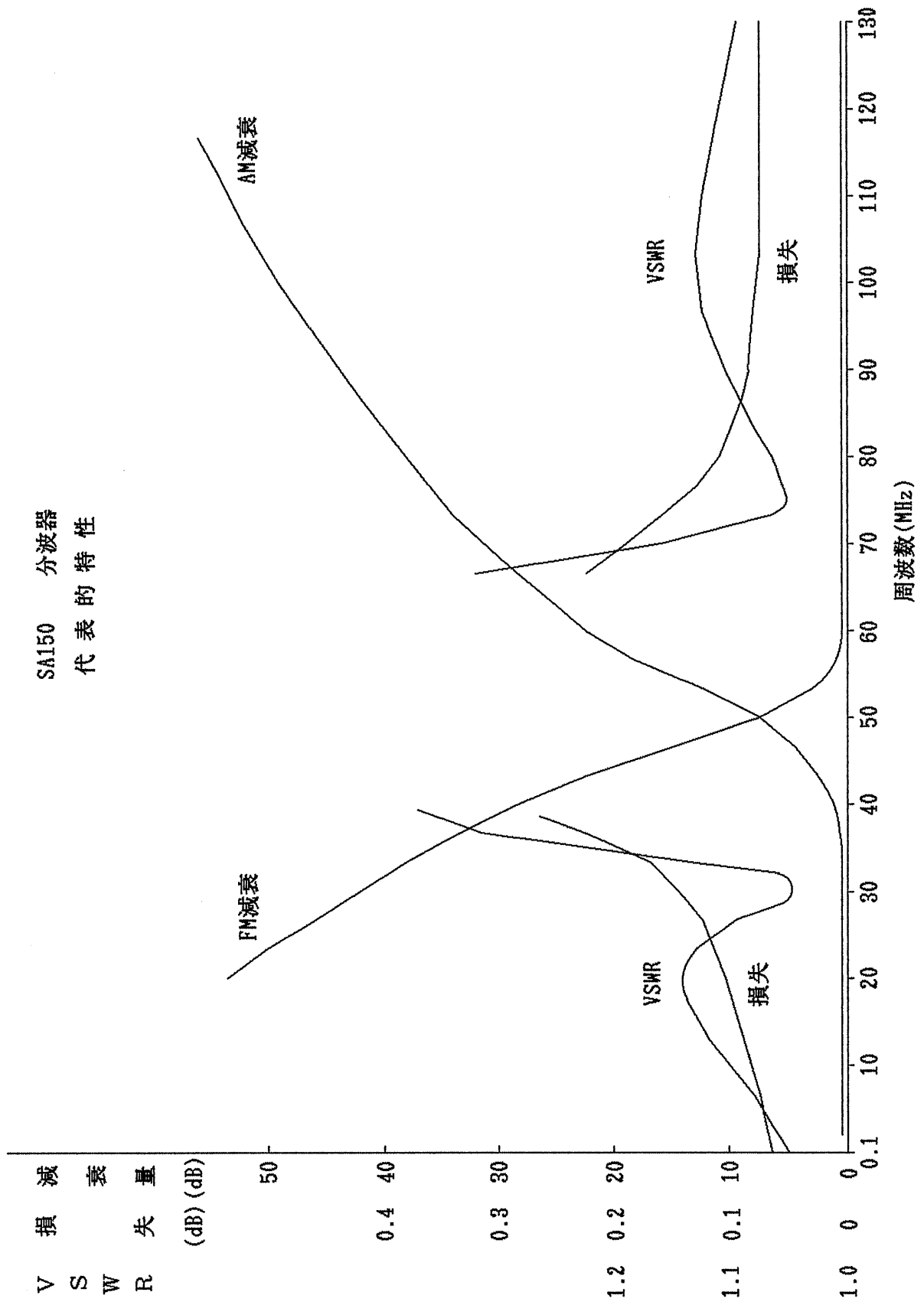
1) 性能

入力周波数範囲	DC～130MHz
入出力インピーダンス	50Ω : BNC-J型コネクタ
VSWR 入出力	1.2以下
出力周波数範囲	AM : DC～30MHz
	FM : 75MHz～130MHz
挿入損失	0.5dB以下



第 9-2 図

第 9-3 图



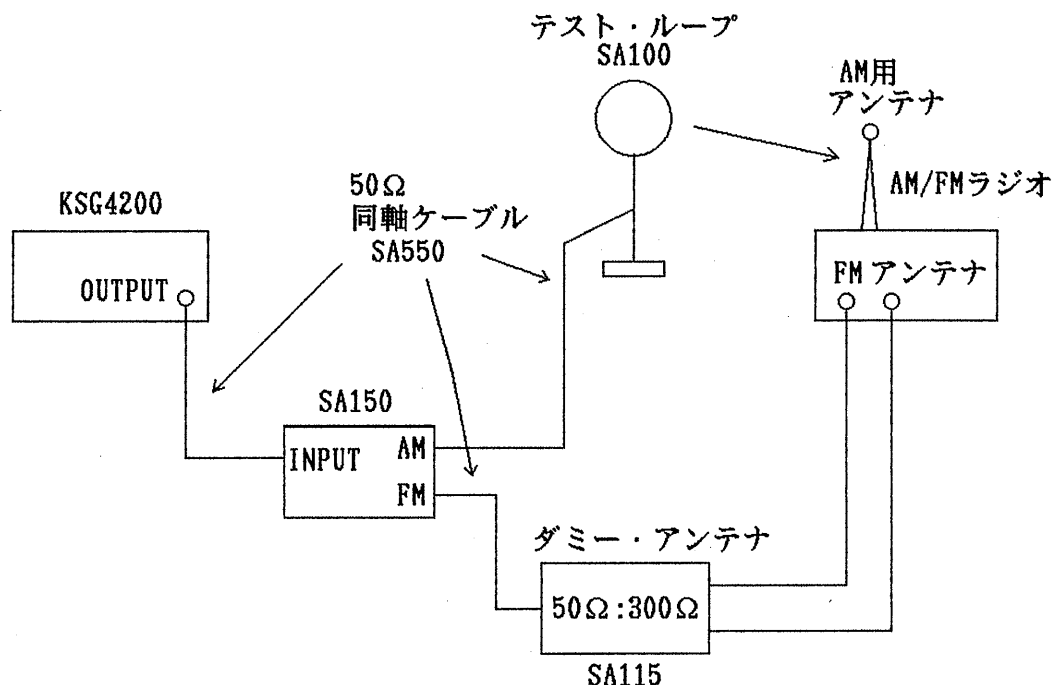
2) SA150 使用例

HPF・LPF の組合わせで、出力信号を分離します。

本体背面の「RANGE OUTPUT」コントロール信号を使用する必要はありません。

使用例を第 9-4 図に示します。

誤差の少ない状態で使用出来る範囲は、30MHz 以下、75MHz～110MHz で、その他の範囲では誤差が増加します。（外観 第 9-2 図、代表的特性 第 9-3 図参照。）



第 9-4 図

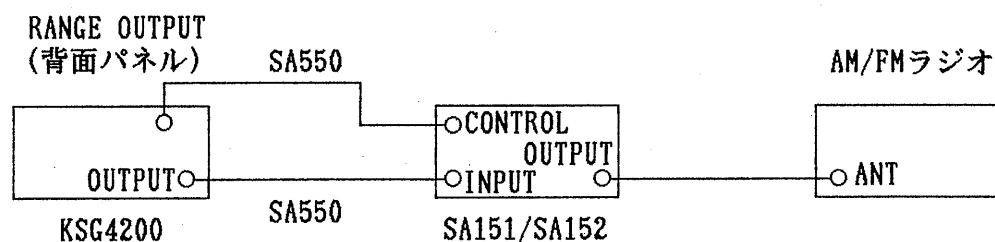
9.3 SA151・SA152カー・ラジオ用ダミー・アンテナ

これらのダミー・アンテナは、JIS C 6102-1988 に準じており、カー・ラジオの試験に使用します。

本体の背面「RANGE OUTPUT」のコントロール電源で AM と FM 用のダミー・アンテナが自動的に切り換ります。

SA151 出力側が AM 80Ω・FM 75Ωの負荷端型

SA152 出力側が AM 80Ω・FM 75Ωの開放端型



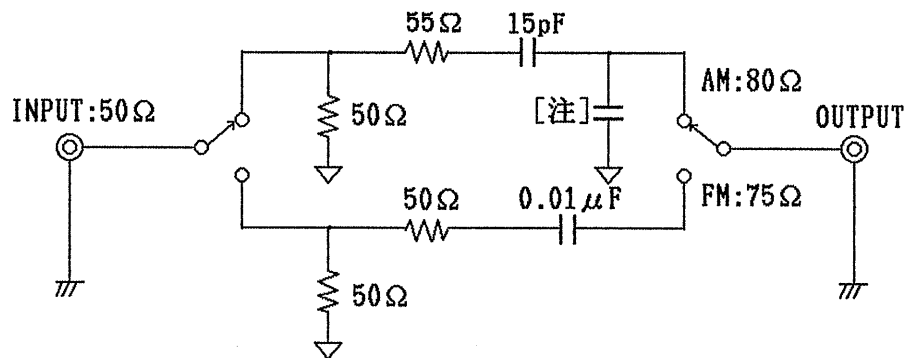
第 9-5 図 接続例

9.3.1 SA151カー・ラジオ用ダミー・アンテナ（負荷端型）

1) 性能

入力周波数範囲	50kHz～200MHz
入力インピーダンス	50Ω : BNC-J 型コネクタ
VSWR	1.2以下
出力インピーダンス	AM 80Ω FM 75Ω
コントロール信号	AM 0V FM 5V 50mA以下
コントロール端子	オーディオ・ピン・コネクタ RCA 型
付属品 SA500	両端 RCA 型ピンプラグ付き 一芯シールド 長さ 0.8m

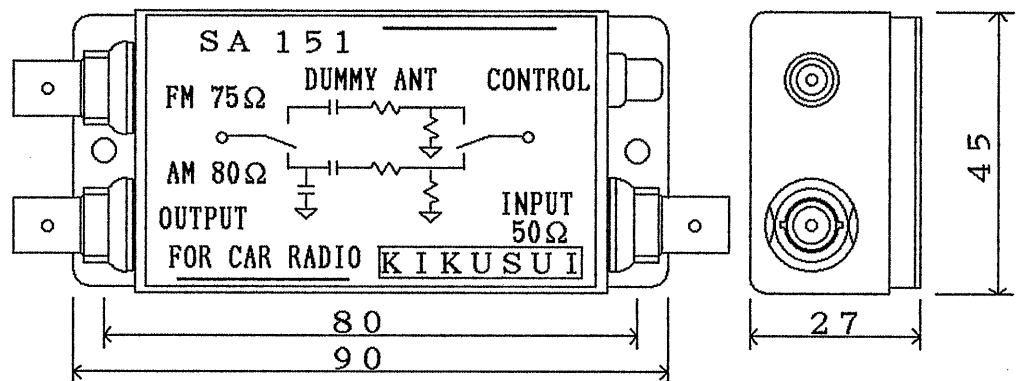
2) ダミー・アンテナ回路図



第 9-6 図

【注】 カー・ラジオ用アンテナ・ケーブル容量も含み、60pF 負荷容量になるように調整し、お使い下さい。（30pF 実装）

3) 外形図



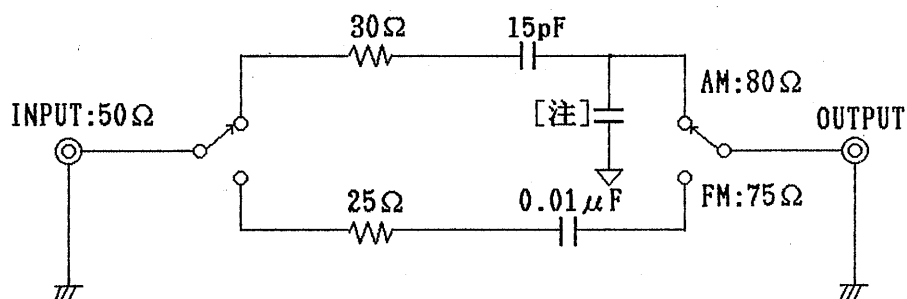
第 9-7 図

9.3.2 SA152カー・ラジオ用ダミー・アンテナ（開放端型）

1) 性能

入力周波数範囲	50kHz～200MHz
入力インピーダンス	50Ω : BNC-J 型コネクタ
VSWR	1.2以下
出力インピーダンス	AM 80Ω FM 75Ω
コントロール信号	AM 0V FM 5V 50mA 以下
コントロール端子	オーディオ・ピン・コネクタ RCA 型
付属品 SA500	両端 RCA 型ピンプラグ付 一芯シールド 長さ 0.8m

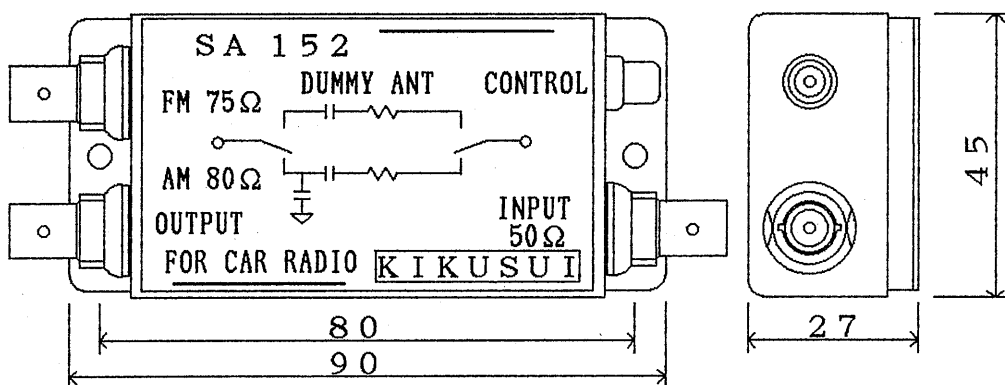
2) ダミー・アンテナ回路図



第 9-8 図

【注】 カー・ラジオ用アンテナ・ケーブル容量も含み、60pF 負荷容量になるように調整し、お使い下さい。（30pF 実装）

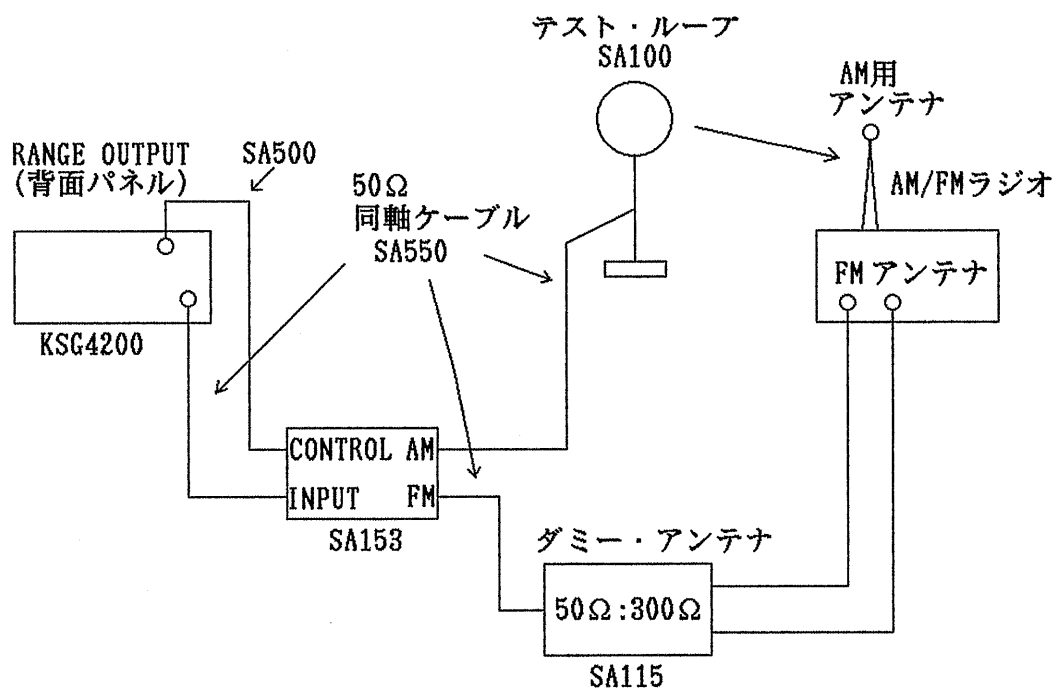
3) 外形図



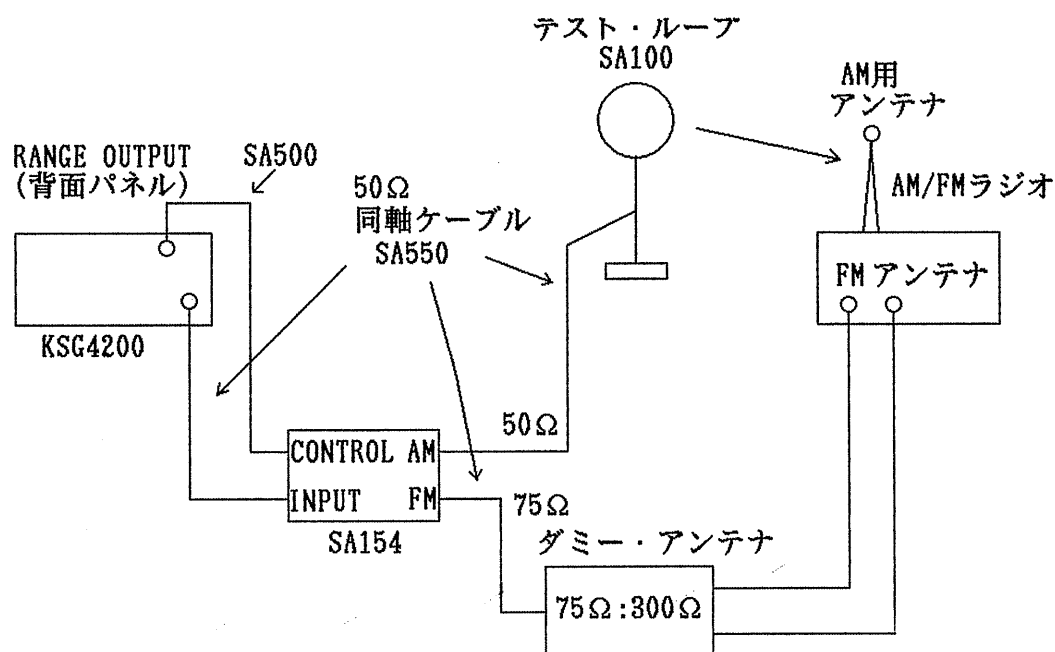
第 9-9 図

9.4 SA153出力切換器・SA154出力インピーダンス切換器

SA153 は、AM 帯でテスト・ループ、FM 帯は $50\Omega : 300\Omega$ のダミー・アンテナを使用し、SA154 は、AM 帯テスト・ループ、FM 帯で $75\Omega : 300\Omega$ のダミー・アンテナ等に使用します。



第 9-10 図 SA153接続図



第 9-11 図 SA154接続図

1) 性能 (SA 1 5 3 出力切換器・SA 1 5 4 出力インピーダンス切換器)

入力周波数範囲 DC～200MHz

入力インピーダンス 50Ω : BNC-J型コネクタ

V SWR 1.2以下

出力インピーダンス

SA 1 5 3 AM 50Ω テスト・ループ用

FM 50Ω 50Ω : 300Ωダミー用

SA 1 5 4 AM 50Ω テスト・ループ用

FM 75Ω 75Ω : 300Ωダミー用

コントロール信号 AM 0V

FM 5V 50mA 以下

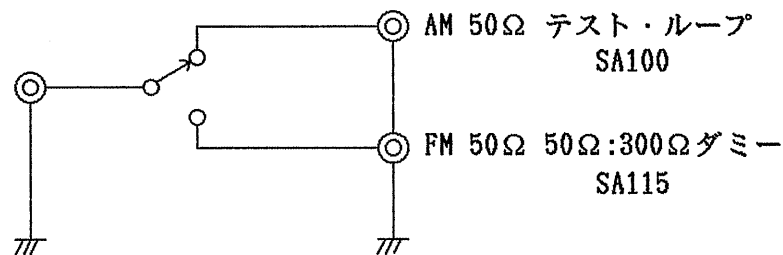
コントロール端子 オーディオ・ピン・コネクタ RCA 型

付属品 SA 5 0 0 両端 RCA 型ピンプラグ付

一芯シールド 長さ 0.8m

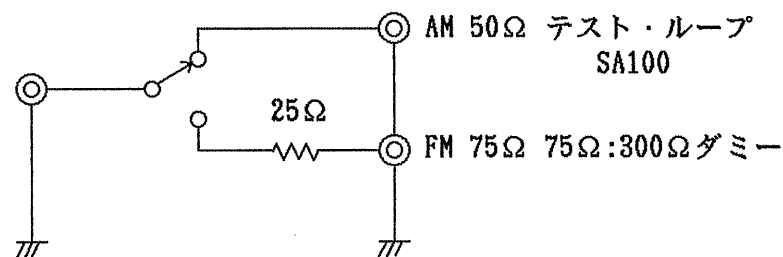
2) 出力切換器・インピーダンス切換器 回路図

SA153



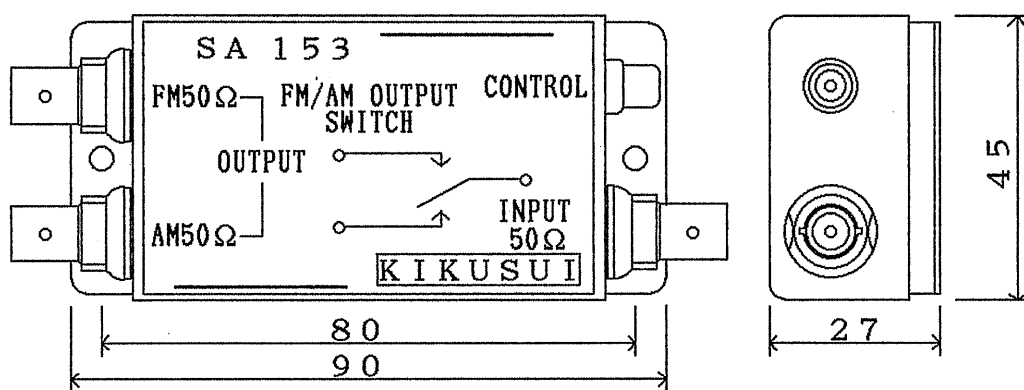
第 9-12 図

SA154



第 9-13 図

3) 外形図

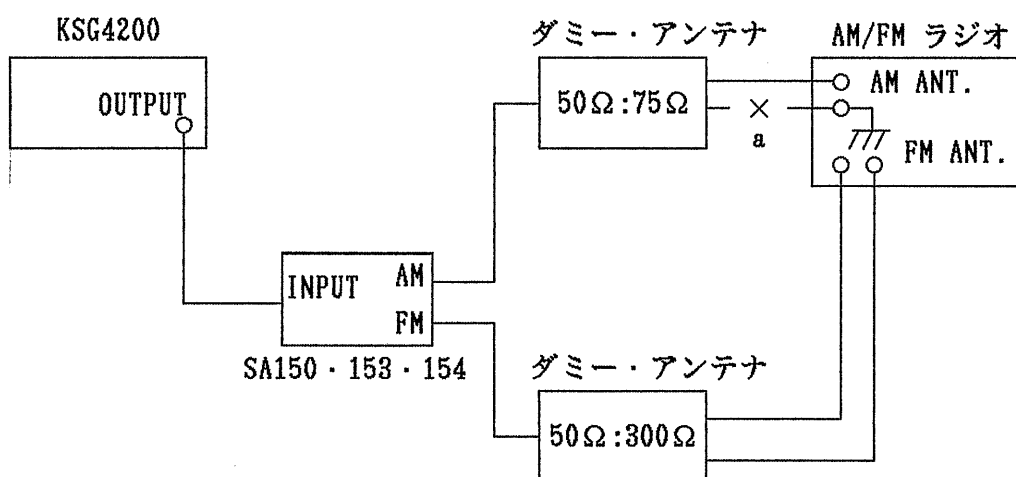


第 9-14 図 外形図

【注】 SA150・SA153、又は、SA154 を使用する場合

第 9-15 図の接続の様に AM 帯 50Ω : 75Ω ダミー、FM 帯 50Ω : 300Ω 平衡型ダミー・アンテナを、AM/FM ラジオに接続して使用する事は出来ません。

a 点において、FM 帯のダミーの平衡が崩れる為です。



第 9-15 図